

---

# デジュン

セイクリッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジユン

### 【Nコード】

N0175D

### 【作者名】

セイクリッド

### 【あらすじ】

世界の真実、戦う意味、彼等はこの戦いで何を見、何を感じるのか・・・ファルスティアという世界、丸い珍獣『デジユン』の熱血ファンタジー小説です。

## 第一話 硝煙の中で

小さな村、バランに住む丸い少年デジュン  
彼は山に狩りに行ったその帰りだった

「結構遅くなっちまったなあ・・・」

もう空は赤く染まっており、山の道は暗かった

「今日は収獲少ないし帰りにくいなあ・・・」

トボトボ歩き、山道から出たときだった

彼は空の赤より更に赤く燃えたバランを目の当たりにした

「な、なんじゃこりゃー!!」

狩りで獲った獲物を捨て、村へ走り出す

「おい!!誰か、誰かーっ!!」

「デ、デジュ・・・ン・・・」

小さな家のドアにもたれ掛かっていた中年の男女がデジュンに呼びかける

「親父!!それにお袋・・・一体何があつたんだよこれ!!」

「クリーチャーだ・・・大量のクリーチャーどもがいきなり村を・・・がふっ」

男は息を引き取り地面に倒れた

「デジユン・・・早く・・・逃げ・・・て・・・」

女も男の後を追うように倒れてしまった

「親父、お袋・・・う、うわああ！！誰かーっ！！誰か生きてる人いないのかーっ！！」

村の中心部へと走り出し、更に残酷な光景をみてしまう

それは老若男女、様々な人達の体のパーツが大量に転がっていた  
デジユンは体が震え、足に力が入らなくなり地面に倒れた

「一体何のためにこんな惨い事を・・・」

「ガイアじゃ、ガイアの仕業じゃ・・・」

木の陰から一人の老人が現れた

「長老！！ガイアて何なんですか！？クリーチャーと何か関係があるんですか！？」

「古に封印されし忌まわしきのガイア・・・  
異形の姿をした人類の天敵ともいうべき存在、クリーチャー・・・  
奴はクリーチャーを操り、このファルスティアを滅ぼそうとして  
いるのかもしれん・・・」

「意味わっかんねえよ！！村をこんなふうにしやがって！！」

オレがガイアを倒して仇を取ってやる!!」

そう言うとデジユンはその場から走り出した

「待てデジユン!!」

長老の声も空しく、デジユンは見えない所まで行ってしまった

「これも運命なのか・・・」

村から結構離れて気付く

「ガイアてどこにいんねん・・・」

## 第二話 謎の使者ドクターN

「はあはあ・・・一体どこなんだここは・・・」

デジュンは村から出て二日間歩きっぱなしだった  
しかし、周りは見渡す限り砂漠で食べ物はおろか、水さえなかった  
上からの太陽光、下からの砂の熱  
水の準備さえしていない者にとってはこれほど過酷な場所はないだ  
ろう

「めまいが・・・」

デジュンが倒れる刹那、誰かが支えたが  
気を失った彼にはわからなかった

「ん・・・」

「気が付いたか坊主」

気が付くとそこはベッドの上だった

「ここは・・・？」

「レダーヨ村の宿屋だ。砂漠のと真ん中で倒れてたんで助けてやつ  
たんだよ」

ベッドの隣のイスに座ってた全身白タイツの怪しい男が言う

「あんたは・・・？あからさまに怪しそうだが・・・」

「私の名前はドクターN、これでも医者だ」

「そうか、一応礼は言っておくよ」

そっぴうとデジユンはベッドから降り、宿屋から出ようとした

「そっだ、あんたガイアて奴を知らないか？」

デジユンはドアに向かったまま尋ねたがドクターNは少し間を開け答えた

「ガイア・・・」

「知ってんのか!？」

「この村で毎年格闘大会が開かれる。そこに手掛かりがあるはずだ」

「おいっ!! 知ってるならもっとおしえ・・・うわっ!!」

ドクターNはけむり玉を地面に投げつけて消えてしまった

「一体何なんだあいつは・・・」

けむりに気が付いた店主が部屋に入ってきた

「ちよつとあんた何やってんだ!!」

「いやオレ違つて!!」

「まあいいや、ちゃんと休憩代二人分払って行ってよね!!」

「マジかよ・・・」

無一文なデジュンに払える訳もなく、

この場をどう切り抜けるか悩んでるちょうど先に

格闘大会ザ・エンペラー・オブ・ファイターズのポスターが見えた  
優勝賞金1000万

「あんたまさか金持ってないのかい!？」

「出るしか・・・ないのか・・・」

このあとデジュンは大会の受付を済ませに行く  
店主の見張りつきで・・・



### 第三話 ザ・エンペラー・オブ・ファイターズ

「はぁ・・・」

選手控室でデジュンがため息をつく

「どうした、あんちゃん？元気がないようだが」

選手の一人だろうか、一人のいかにも強そうなマツチヨマンが後ろから話しかけてきた

「いや、なんでもないよ」

後ろを振り向くとあまり人がいない事に気づいた

「なあ、この大会で結構人気あんだろ？」

「ああ、ここまでデカい格闘大会でいったらこのエンファイしかないぜ」

「の割には選手が少なくねえか？見たところオレ含め8人くらいぽいが・・・」

まわりを見渡しながらデジュンは言ったが男はある選手を見つめている

「奴さ・・・」

「奴？」

「ああ、あそこのベンチに座っている奴だ」

男は、ベンチで寝ている男を指差した。

長く鮮やかな青色の髪しており

まだ10代後半だろうか

あどけなさの残り、女性と見間違うほど美形な男だった

「あいつがどうかしたのか？」

「奴の名はスラップ、15歳から2年間このチャンピオンだ」

「15歳でチャンピオンかよ！？それはすげえな・・・」

「強過ぎるんだよな、だからこの大会に出場するのはオレみたいな余所者くらいだ」

「あんた、この町の人じゃないんか」

「まあな、出稼ぎみたいなもんだ

だが、一番の目的は格闘家として奴と手合わせてみたく出場したんだがな」

「あゝ・・・オレはあんま興味ない世界だな・・・」

一人で燃えてる男のとなりでデジュンは顔をひくつかせながら言った

「あんたは何で出場したんだ？」

「まあ色々な理由があるんだよ・・・」

とデジュンが言っすぐアナウンスが流れた

「トーナメント表が決まりましたので選手の方は確認して下さい、繰り返します・・・」

「お、どうやら決まったみたいだぜ。あそこの壁に係が貼ってるのがそつみたいだな」

「オレは楽な選手がいいなあ・・・」

「!!--」

男は表を見て驚きの表情をした

「どうした？ウンコか？」

「いや、一回戦の相手が奴だ・・・」

「ほんとだな、まあやられないよう頑張れよ（笑）」

デジュンの声が聞こえてないのか男は手を握り締め震えていた

「それではあ!!!エンファイ第一回戦を始めます!!!」

レフリーがリングの中央でそう言う会場は一斉に歓声が沸いた

「ホントにデカイ大会なのね・・・」

あまりの観客の多さにさすがのデジューンはビビり気味だった

「赤コーナー！！ドルガン選手のお入場です！！」

ドルガンと呼ばれた男はさっきのマツチヨマンだった

それなりの歓声を浴び男はリングに上がる

「青コーナー！！3年連続チャンピオン、スラップ選手のお入場ですー！！」

「キヤー！！スラップ様ーっ！！」

「こつちをお向きになってー！！」

「キヤー！！私に手を振ってくれたわぁ！！」

スラップ選手が入場しリングに上がっても尚、黄色い声援は止まらなかった

「なんすかコレ・・・」

デジューンはドン引きだった

「それではあ・・・」

レフリーがそいうと黄色い声援は止まった

「エンペラー・オブ・ファイター！！レディ・・・」

ドルガンとスラップが構える

「ゴオオオオオオオオオオオオ！！」

その掛け声とともに会場は熱狂の渦に巻き込まれる

「スラップ殿、いくぞ！！」

「いいぜ、おっさん！！来い！！」

ドルガンはスラップ目掛け飛び蹴りをかます  
だがスラップは余裕の表情で避ける

「どうした、おっさん！！もつと来いよ！！」

「くっ・・・どありゃーっ！！」

すごい豪腕パンチのラッシュだが  
スラップはすべて避けている

「たいした事ないよアンタ・・・」

スラップはドルガンの腹にパンチを当てる

「がぶお・・・！！」

「出直してきな・・・」

スラップが言い終わるとドルガンは吹っ飛んだ

床に倒れ、立ち上がることは不可能なのは誰の目にもあきらかだった

「お見事！！スラップ選手のＫＯ勝ちです！！」

会場は更にすごい歓声が沸いた

「さすがチャンピオンだな・・・あのパンチ、一発に見えて三発も繰り出すとは・・・」

どこかで聞いたような台詞をデジyunは吐く  
こう見えてもデジyunは長い間狩りで猛獣と戦っていたため  
それなりに強い・・・かもしれない

「それでは第四回戦です！！赤コーナー、デジyun選手のお入場です！！」

「よっしゃ！！いつちよやるか！！」

控室からデジyunが出てくる

「3位まで賞金出るから何とか頑張れ」

歓声の中から宿屋の親父の声が聞こえた

「ふっ、目指すのは優勝だぜ！！」

そう呟いた刹那、後ろから声が聞こえた

「調子に乗るなダスよ」

「！！！」

振り向いた先には何とも不気味なグリグリ眼鏡の学ラン男がいた

「おおっと！！ベンゾウ選手、いつのまにかリングに上がっていた  
あ！！！！」

「優勝するのはオマエでもスラップでもない、ワシだす！！  
優勝してユキさんに振り向いてもらうダスよ！！」

「女目当てのオマエなんかには負けるかよ！！」

「一触即発な雰囲気なので始めます！！レディ・・・、ファイツ！  
！」

試合開始の合図とともにベンゾウがデジユンに襲い掛かる

「ユキさーん、今イクだすよー！！」

ベンゾウは上着のポケットからペンを取り出し、デジユンに投げた

「うおう危ねっ！！飛び道具ありなんかよ！！」

「まだまだイクだすよー！！ユキさーん！！」

ベンゾウは定規、消しゴム、エロ本、色んな物を投げてきた

「さすが学生だな、色んな物持ってやがる！！」

「なっ！？全部避けたダス！？」

デジユンは一瞬でベンゾウの懷に潜り込んだ

「悪いな、オレも優勝しなきゃいかん訳があるんでな！！」

ドゴッ

ベンゾウのみぞおちからニブい音が鳴った

「くぁwせdrftgyふじこー・・・」

ベンゾウはその場で崩れ落ち、観客は沈黙になった

「お、おおっとー！！なんと丸い生物、デジユン選手一発KO勝利ですー！！」

一気に歓声が沸き上がり、それはスラップの勝利と同等、それ以上かもしれない

デジユンはガッツポーズを取り、リングの外にいるスラップを見た

「あいつ、丸いくせにオレと同じ三発繰り出しやがった・・・  
ふっ・・・今回はなかなか楽しめそうじゃねえか！！」



「奴らがそうか・・・？」

「みたいだな」

黒装束をまとった二人は会場から離れた場所でリングを眺めていた

#### 第四話 その業、まさに衝撃

「ふゝ何とか決勝まで上がってこれたなあ・・・」

デジユンは決勝までなんとか勝ち残り、控室で休憩していた  
決勝まで残れたもののデジユンの体にはキズ一つなく  
明らかに余裕の勝ち残りだった

「よお丸いの」

「お？スラップに負けたおっちゃんじゃん」

デジユンに声を掛けたのは一回戦でスラップに敗れたドルガンだった

「まさかオマエみたいな丸いのが決勝まで来るとは思わなかったよ」

「あんたこそ筋肉マンなのに一回戦で敗れるとは思わなかったよ」

「ふ・・・まあオマエさんには期待してるんだぜ？

せっかくここまで来たんだ。あの美形に一発かましてやれよ！！」

力強い握手を交わし、ドルガンは去っていった

「勝ってみせるさ・・・店に借金があるしな！！」

「それではあ！！決勝戦を始めます！！」

レフリーの挨拶が始まり選手入場が始まる

「よお丸いの。オマエなかなか強そうじゃないか」

リングで向かい合ってすぐスラップが喋りかけた

「あんたこそな。伊達に3年連続チャンピオンじゃねえってか？」

「ふ・・・回りが弱すぎたんだよ。オレはオマエみたいな強い奴を待っていた！！」

「楽しめそうだな！！」

「ああ！！」

「おおと！！既に二人は盛り上がってる様子！！  
さっそくゴングを鳴らしましょう！！」

「行くぞデジユン！！」

ゴングが鳴ってすぐスラップは仕掛けてきた

「正面！！そこか！！」

スラップに向かってと飛び蹴りをかましたが残像だった

「な、残像だと！？」

気付いたときには遅く、スラップは背後にいた

「甘いぜ、丸いの!!」

ドガッ!!

デジュンは空高く蹴り飛ばされ、スラップもそれを追いかけた。

「このままリングアウトで終わらすのは惜しいだろ？」

スラップの空中での乱撃が炸裂した

「どうした丸いの!! オマエはこんなもんな・・・が!!!？」

スラップは顔面に一撃を受け地面に急降下する

「まだまだ!! くらえロンゲ!!」

デジュンもそれを追い、スラップ目掛け急降下する  
スラップはダメージ最小限に着地し、上を見上げた

「いいね!! 久々だよ、こんな痛みは!!」

二人の拳がぶつかり合い、リングに衝撃で穴が空いた

「す、すごすぎてとてもリングにいれませうん!!」

レフリーはリングから降り、外から実況を続けた

「やっぱオマエなかなかやるよ・・・」

「オマエも美形のくせに強いな」

「羨ましいのか？ま、悪いけどそろそろ決めといかせてもらっよ。オレも何かと忙しい身でね」

「オレもこの試合に勝ち、やらなければいけない事があるんでな」

二人は一斉に構え

スラップは右手にオーラを溜め始めた

「敬意を表してオレのとおきで仕留めてやるよ!!」

「オレも切り札を使わせてもらっぜえ!!」

デジュンの体中にオーラがみなぎり、二人の間に緊迫した空気が流れた

「いつくぜー！！！！っ!!」

「来いや丸いのー！！！！っ!!」

お互い正面に走り出し、二人がぶつかりあう刹那

ドオオオオオオオン

リングに何かが衝突し、エンファイ会場は跡形もなく崩れた

「な、なにが起きたんだ!？」

瓦礫の山からデジュンが顔を出し、回りを見渡した

「くっそ……一体誰だ！！邪魔しやがったのは！！」

スラップは立ち上がり、目の前の砂埃にうつすらと見える二人の人影に向かって叫んだ

「茶番だな……」

姿が見え始め、頭にはフードみたいなのを被った黒装束の一人が呟いた  
右肩には銀の甲冑をし、表情は伺えないが何ともいえない冷たい雰囲気漂わせた

「くだらん、雑魚同士で盛り上がってよ」

逆に左肩に金の甲冑をした男は赤い瞳でスラップとデジュンを見やっ  
った

「なんだ貴様らは！！」

デジュンは金の甲冑の男に近いた

「これから死ぬ奴にとっては関係ない事だろ？」

右の手の平をデジュンに向けた瞬間

「がはあっ！！」

デジュンは何かに吹っ飛ばされ、地面に転がった

「デジュン!!」

スラップはデジュンに駆け寄ろうとしたが

彼もまた金の甲冑の男の不思議な力に吹っ飛ばされた

「く、なんだこれは・・・」

デジュンは立ち上がり、二人を見やった

「まあ名も知らぬ奴に殺されるのも不憫だな。

こいつはエイス、オレはオージだ。

オレは衝撃を操る、貴様らこときではオレに近づく事さえ出来ん  
よ」

「衝撃・・・だと!??」

「そうだ。貴様のようなチンケな格闘ごつことは違うんだよ!!」

先程よりも激しい赤い突風のような衝撃がスラップを襲う

「ぐ、ぐうつ・・・!!」

「スラップ!!」

「貴様の相手はオレだ・・・」

「!!」

いつのまにか背後に銀の甲冑の男がいたが  
蛇に睨まれた蛙のようにデジユンは身動きが取れなかった

（なんだこの冷たすぎる気配は・・・今振り向けば確実に殺される・  
・・・!）

「大人しくしていれば貴様は殺さない・・・」

「待てい!!」

リングの中央に大量の煙が現れた

「こしゃくなマネを!!」

金の甲冑の男は衝撃で煙を吹き飛ばし  
煙が晴れたそこには全身白タイツの男が立っていた

「変態ドクターN!!」

「助けに来たぞデジユン、スラップ!!」

「な、なんだあの恥ずかしい格好した奴は・・・」

スラップはドン引きだった

「貴様は・・・」

「何だエイス、知り合いか？」

「いや、何でもない・・・」



「今ここで、こいつらをやらせる訳にはいかんのでね!!」

ドクターNは煙玉を地面に投げ付けた

「させるか!!」

オージは衝撃波で煙を払ったが、そこにはドクターNの姿はなく  
デジュン、スラップの姿も消えていた

「やられたな・・・」

「ああ・・・だが奴らの目的は検討が付く・・・」

「ならばオマエにまかせるぜ？オレには別の用事があるんでな」

「悪巧みか？オージ・・・」

「まあそんなところだ」

オージはニヤリと笑みを浮かべた

「また何かあつたら呼んでくれや」

そついうとオージはどこかへ消えてしまった

「食えん奴だ・・・」

エイスもこの場を去ろうとした瞬間

「ぐ．．．がつ！！」

エイスは口から血を吐き出した

「そうか．．．もう時間がないのだな．．．  
早くしなければ．．．なんとしても奴を．．．」

血を拭い、エイスも瓦礫の会場から姿を消した  
エンファイ会場は先程の騒ぎが嘘のように、  
初めから誰もいなかったように静かだった．．．

## 第五話 仲間を求めて

広い高原で一人の少年の声が木霊する

「デメエー体何のつもりだ!!」

「・・・・・・・・」

「・・・・じゃねえよ!!」

スラップがデジュンとドクターNの間に入る

「もうよせデジュン、こいつが助けてくれなければオレ達は間違いないで殺されていた・・・」

「くっ・・・・・・・・!!」

「ふむ、スラップの方が賢いじゃないか」

「デメエっ!!」

デジュンの一度は収まりかけた怒りが再び燃え上がる

「オマエは少し黙ってろ」

スラップの膝蹴りがデジュンの顔にヒットし、デジュンはその場に倒れた

「・・・・それで、オマエの目的は何だ？何故オレ達を助けた？」

先程までは穏やかだったスラップが鋭い目付きで睨みながら問い掛ける

「その目付き、態度、あいつにそっくりだな・・・」

「何言ってるんだお前は？」

「いいか、これから言う私の言う事は何一つ疑う事なく聞いて欲しい」

ドクターNは急に真剣な表情、いや顔も白タイツで覆われているため真剣かどうかはわからないが

何となく真剣に思えたため、スラップは怒りを落ち着け、耳を傾けた

「率直に言おう、キミ達は1000年以上昔にガイアを封印した伝説の勇者の転生した姿だ」

「は？」

「ガイアだって!？」

何言ってるのかわからないといった表情のスラップの後ろで、デジユンが起き上がった

「そう、クリーチャー達の長、ガイア・・・」

遙か昔、4人の勇者によって封印され、

ファルスティアからはクリーチャーが消え、平和になるはずだった・・・」

「オレが生まれたときには既にクリーチャーは存在していたが、そのガイアとやらが復活したとでもいうのか？」

「そうだ、およそ１００年前にガイアは復活し、昨今ではクリーチャー達の動きも活発になってきている」

「奴らのせいでオレの村が・・・」

「デジュン、キミをスラップに合わせるために私はキミを大会に参加させるよう仕向けたのだ」

「な!？」

「出来ることなら、自然にキミ達の勇者の力の共鳴で引き合わせたかったのだが、

今はそうは言っていられん。いつまた先程のガイアの手下に襲われるかわからぬしな」

「それでオマエはオレとデジュンを引き合わせ、ガイアを倒せというのか？」

「今のオマエ達では無理だ、確実に殺される」

「じゃあどうすんだよ!!!ガイアは村のみんなの仇なんだ!!!どうすればいい!!!」

「落ち着け、今のままではという事だ。

これからオマエ達には、同じ勇者の生まれ変わりを探し出し、精霊の加護を受けに行ってもらう」

「精霊の加護やら勇者の生まれ変わりやら、一番肝心なのはオマエの正体だろ？」

「一体オマエは何者なんだ？」

「ふむ、スラップ君の言うことも正しい・・・いいだろう」

そういうとドクターNは二人に近づく

「私は1000年前、伝説の勇者達をサポートしていた者だ」

「またえらいジイさんだな・・・」

「私は人間ではなく、遙か古代に造られしロボット・・・勇者達がガイアを封印したあと眠りに着いた、

しかし世界の異変に気付き、私は眠りから目覚めた・・・

そう、ガイアを倒せる者、つまり勇者の生まれ変わりを探すために！！」

「いやあ、なんか突っ込み所が多すぎて、どこから突っ込んでいいのやら・・・」

デジyunはかなり引いた

「なるほどな、わかったよ

オレもクリーチャー達には恨みもあるし、

さっきのガイアの手下の二人組みの件もあるしな、やってやるよ」

「わかったのかよ!？」

スラップの物分かりの良さにデジyunはかなり引いた

「そう言ってもらえると助かるよ」

「でよ、オレ等これからどうすんだ？」

「それについてだが、勇者の一人の場所を突き止めたのでそこに行ってくれたまえ」

そう言うとドクターNは簡単な地図を差し出した

ここからそう遠くはない森の中にネコフン村と書いてある

「ここには大地の精霊もいるので、精霊の加護も受けてくれ」

「なるほど、一石二鳥で訳か。だがこの森は・・・」

地図を眺めるスラップとは別に、隣にいたデジュンが叫び出した

「おっしやああ！！やったるぜ！！すぐ出発だ！！」

「その意気だデジュン、私は残りの勇者、精霊の情報を集める頼むぞ、ファルスティアの未来はキミ達にかかっているのだ」

ドクターNはお約束の煙球を地面に投げ付け姿を消してしまった

「ゲホッゲホッ・・・くっそ、あの変態またかよ！！」

煙に咽るデジュンとは別に、スラップは地図を眺め悩んでいる

「しかし、この森は確か・・・」

「何やってんだよスラップ、早く行こうぜ!!」

「あ、ああ、わかった」

薄暗い大広間に一人の男がいた

その大広間に一人の鎧を纏った、腕が6本の男が現れた

「お呼びでしょうか、エイス様・・・」

「アシュラか・・・貴様にガイア様より承った命令を言い渡す」

「ハッ、何なりとお申し付け下さい・・・」

「ネコフン村へ行き、村の住人、施設、全て破壊しろ」

「ハッ、しかしその村に何かあるのでしょうか・・・?」

「ガイア様の意志だ、口答えは許さん・・・」

その直後、アシュラの頭の中に声が流れた

『我ノ命令ガ不服力・・・?』

それは紛れも無い、エイスの後ろの巨大なカーテンの後ろにいるガイアの声だった



「い、いえ！！滅相もございません・・・」

先程までは命令に不満を感じたアシユラもガイアの声を聞いた瞬間、萎縮してしまった

「ならば行けい、兵はいくら使っても構わん！！」

「ハッ！！」

そう返事をするアシユラはすぐに大広間から出た

「大地の精霊・・・奴等をあそこに行かす訳にはいかん・・・」

エイスは不適な笑みを浮かべ呟いた・・・

「うむ？今日は森の小鳥が騒がしいのう」

そう言うと少女は空を見上げた

「何か、不吉な予感がするのう、  
気のせいならば良いのじゃが・・・」

## 第六話 訪れる悪夢

深い森の中を歩く人間一人と珍獣一匹

「おいおい、こんな森の中に村なんてあるのかよ……」

珍獣は文句を言いながら歩いていった。

「ああ、確かこの森には古くから伝わる一族が……」

「お！？なんか村っぽいのがあぜ！！」

そついうとデジyunは前方に見えるある村に走っていった。

「おい待て！！」

スラップの声空しく、デジyunは何かに吹き飛ばされ、スラップの目の前に転がってきた。

「だから言っただろう……」

「な、なにが起こったんだ！？また衝撃の何とかか！？」

「この村には、古より古代魔法を扱う種族が住んでいるんだよ。」

デジyunに手を差し伸べ、スラップは続けた。

「ここに住む連中はな、こうやって結界を張って完全に外界との接触を断っているんだ。」

「なんでそんな事するんだよ。」

「滅びたはずの古代魔法、それを扱えるのはこの『ゲミル族』だけだ。」

ゲミル族はかなりプライドが高く、外界の人間との接触を嫌う。だからこうやって結界を張り、この土地、そしてゲミル族としての誇りを守り続けているんだよ。」

「オマエ、結構物知りなんだな・・・  
ただの格闘バカかと思ったが（笑）」

「オマエと一緒にするなよ・・・」

スラップはネコフン村に向き直った。

「もし、ここに勇者や精霊がいるとしても  
中に入れないんじゃないかな・・・」

そのとき、後ろに何者かの気配を感じた。

「誰だ!!」

二人が振り向いた先には白いワンピースの女性がいた。  
肩くらいまであるブロンズの髪がとても美しく、  
かなり美人である。

「お主等こそ誰じゃ」

「オレはスラップ、この丸い奴はデジュンていうんだ。」



ネコフン村から割と近い所にある小さな家  
スラップとデジュンはそこに招待され、  
彼女から差し出されたお茶を飲んでいた。

「儂の名はリアナ」フェズリールじゃ。  
見ての通り、ただの女じゃ。」

「ではこちらでも改めて自己紹介しよう、  
オレはスラップ」トローラーで  
こいつがデジュンだ。」

「よろしくな!!」

さて、とスラップは話を続けた。

「なんで初対面のオレ達にこんな親切なんだ？」

「ふむ、その前にこちらから聞いてもいいかのう？」

リアナはお茶を一口飲み、続けた。

「お主等、あそこの村に何の用じゃ？」

まさに的中でデジュンは口に含んだお茶を噴出した。  
そんなデジュンをよそにスラップは冷静に答えた。

「よくわかったな・・・」

「こんな深い森の、小さな村に来说えば、あの村しかあるまい」

「そんなしょっちゅう誰か来るのか？」

「ゲミル族の古代魔法の技術、永年祀られている精霊、あそこに行くといえればそれが目的しかあるまいて。今までもそれを狙う奴らがしょっちゅう来てな。」

「なるほどな、やはり研究者とかが来るのか？」

「研究者もおれば、ただ純粹に魔法を力を得たいがために来る者もある。」

しかし、ゲミル族は何人であろうと村には入れぬ。」

「そうか・・・何とか中に入れさせてはもらえないのか？」

「無理じゃな、どんな理由があるにせよ無駄じゃ。諦めるがよい。して、如何な用じゃ？」

「それは・・・すまない、言えないんだ」

「素直に勇者探しに来たって言えばいいじゃねえか（笑）」

空気が読めず突拍子もない事を言い出したデジューンはスラップに殴り飛ばされた

「バカかオマエは！？そんな事言っつて逆に混乱させるだろうが！！」

「オマエは回りくどいんだよ！！このロンゲがあ！！」

そんな二人のやり取りを見たリアナは

「ぷ・・・あははははは！！」

「ん？」

突然のリアナの大爆笑に二人の喧嘩は収まった。

「いやいや失敬、お主等があまりにも面白くてのう。」

「はあ」

「何故かお主等を初めて見た瞬間、今までの連中とは違うと思ってな、

こうやって話を聞いてみたいと思ったのじゃ」

「かなり変わり者だな、あんたは」

「いやいや、お主の方が変わり者だから。丸いし。」

「まあそれはそれで、どうしてもあの村に用があるんだが、何か良い方法はないか？」

「ふむ、難しいのう・・・」

先程も言った通り、ゲミル族はあいう種族だからのう。

出来れば儂もお主等なら手伝ってやりたいのじゃが・・・」

そのときだった。

ネコフン村の方から凄まじい爆音が聞こえたのは。

「な、なんだ！？」





「ふん、こんなちんけな結界などオレに掛ければ軽いものよ。」

ゲミル族の結界はアシユラの不思議な術で爆発と共に消え失せた。

そして突然の来訪者達にゲミル族は驚きの顔を隠せなかった。

「貴様何者だ！！この村に何か用か！？」

「さあ？これが命令なんでな・・・殺れ」

アシユラの号令が出ると同時に多数の武装した黒服の手下達はゲミル族を殺すべく向かって行った

「問答無用ならこちらも容赦はしない！！」

そう言うときゲミル族は一斉にアシユラ達に向かって呪文を唱え始めた

「む！？」

アシユラの足元から突然炎が立ち昇り、そしてそれは大きな火柱となって黒服達も巻き込む。

「やったか！？」

「ゲミル族の同時一斉魔法だ！！これで灰にならん奴はいない！！」

しかし、その大きな火柱が一気に消し飛んだ。



「はあはあ、これは・・・!？」

リアナが村に着いた直後、見にした光景は凄まじく、誰もが目を背けるであろう惨劇であった・・・

「な、なんじゃこれは・・・」

ゲミル族が一人の男に向かう度に真つ二つにされ、その男の足元には何人もの、両断にされたモノが転がっていた。

「や、やめる・・・」

リアナは声を何とか出そうとする。

「やめるのじゃ・・・」

だがあの鬼神のごとき男には届かない。

「ヒヤーツハッハー!!どうした!!こんなもんかよ!？」

所詮、結界の中に引き籠るしか能がねえ種族なんか目じゃねえんだよ!!」

「やめる――――！！！」

「あん？なんだあの女は？」

リアナのやつと出せた大きな声に、アシユラはその存在に気付いた。

「ふん、女だろうと容赦はしねえぜ・・・!!」

そう言うのアシユラはリアナの元へ凄まじい勢いで走り始めた。

「く・・・」

リアナは敵わないと知りつつも構え始めた。

皮肉なものじゃな・・・

儂等を蔑んできた者達を庇う事になろうとは・・・

そう思い、覚悟した瞬間・・・

「ぐはっ!!」

アシユラの頭上にデジュンが落ちてきた。

「いってー!!あのロンゲぜってーぶっ殺す!!」

デジュンはそう呟いたあと、自分の下に倒れているモノを見た。

「ん?誰だこいつ?」

「があー!!」

アシユラは勢いよく立ち上がり、デジュンは転がった。

「貴様・・・貴様だけは楽には死ねんぞ・・・!!」

「お?お?一体何が?」

やはりこの緊迫した雰囲気には  
この丸い生物は似合わない  
この場にいる誰もがそう思った・・・

## 第七話 記憶の中に住まう悪夢

「ははうえゝ!!」

長いブロンズの女性に、同じブロンズの髪の子供が駆け寄る。

「どうしたのリアナ？」

「みんなが儂をいじめるのじゃ!!」

大魔法使いの娘なのに、オマエには魔法の才能が無いって・・・」

「ふふ、大丈夫よ。」

リアナも大きくなったら必ず上手になれるわ。」

「ほんとか!？」

「ええ、本当よ。」

そのためにはまず、その喋り方を何とかしないとね。」

「喋り方？」

「ええ、そうよ。」

女の子なんだから、ちゃんと女の子らしい喋り方をしないとダメよ?。」

「ふむ、そうかのう・・・」

母のカレンはネコフン村でもトップに立つ大魔法使いであり、

かつてファルスティアーの大魔法使いであった現長老ジグマールの一人娘でもある。

儂はその娘なのだ・・・

ネコフン村でのトップともなると、村の住人達への魔法講習等で儂と共にする時間などまるで無かった・・・

だから儂は幼いときから祖父のジグマールに面倒を見てもらっていた。

「困ったわねえ、おじいちゃん言葉が移っちゃったのかしら？」

「儂は何も困らんぞ？」

「まあリアナがそう言うなら良いんだけど・・・」

「それより、今日は母上はずっと家にいるのだろうか？  
なら儂の魔法の特訓をして欲しいのじゃ！！」

「ええ、いいわよ。」

今日は炎の呪文のレベル1からだったかしら？」

母が家にいるときはよく魔法を教えてもらっていた。

しかし、いくら特訓しても一向に上達しなかった。

大魔法使いの母の一人娘なのに魔法がまったく使えない、  
そんな事では母の名に傷をつけてしまう・・・

カレンの娘で恥ずかしくならないよう

頑張らなければならなかった。

そんなプレッシャーは日に日に大きくなっていく・・・

そんなプレッシャーに押し潰されそうなとき、  
父のラルフと久しぶりに会った。

父も大魔法使いの夫となると、やはり多忙だった。  
母の手伝い、村の管理等で母同様、家に帰る時はあまりない。

「父上、僕は母上みたいに魔法をうまく使えないのじゃ・・・  
やはり僕には才能がないのかのう・・・」

「そんな事はないよ、  
リアナは今のままでいいじゃないか。  
魔法だって完璧な訳じゃないんだよ・・・」

「うむ・・・」

「お父さんだって魔法は使えないが、  
こうして何不自由なく暮らしている。  
そうだろう？」

「うむ・・・」

僕はこのとき一つの疑問を持った。  
ネコフン村の住人達は皆、うまい下手はあれど  
全員魔法を扱える。

しかし、父だけは使えなかった。  
魔法使ったのを見たことが無かった。



何故使えないのか、幼いときからの疑問であつたが父や祖父、母にも聞いたことはなかった。触れてはいけない事だと思つたのだ。

母は大魔法使いなのに、父は使えない。

もしかしたら父は落ちこぼれなのかとも思つた。そう思うと余計に聞けなかった。

しかし、その謎はある日突然

何の前触れもなく解き明かされる事になる・・・

「長老！！大変です！！」

「何事じゃ、騒々しいぞ！！」

「そ、それが・・・」

突然村の結界が解かれ、何者かが侵入して来ました！！」

「なんじゃと！？一体誰が結界を・・・」

いや、まずはその侵入者を何とかせねばらん！！」  
侵入者は何人じゃ？」

「約200人です！！」

現在は中央広場で他の者が足止めしています！！」

「わかった。

至急女子供は避難させ、  
カレン達大魔法使いを集合させるのじゃ！！」



「結界を解いたのは貴様等か・・・  
この村に何の用があつて来た？」

ジグマールは武装した集団の中にいるリーダーらしき人物に問い掛けた。

儂はそれを、100m程離れた場所で見える。

「これはこれは、かつてファルステイアの大魔法使いと謳われたジグマール様ではありませんか。

私はクルクト国のアルバドと申します。

以後、お見知りおきを・・・」

「クルクト国じゃと・・・？」

「まあこんな所で引き籠もっているあなた達には  
外の世界の事など知らないでしょう。」

「さつさと用件を言え。

返答によつては・・・」

「まあ率直に言いますと、この薄汚い村に存在する  
精霊を頂きに来ました。」

「な、なんじゃと!？」

貴様一体何を企んでおる!!」

「あなたもクリーチャーをご存知でしょう？」

今、我々の国ではクリーチャーに対抗すべく、  
ある兵器が開発されていてね。

その兵器に是非、精霊の力を与えたいのですよ。」

「精霊をむやみに扱うとファルスティアのバランスが狂うのじゃぞ  
！！」

それが貴様にはわからんのか！！」

「我々がこの世界を救おうと言うのです。

まあクリーチャーを駆除した後は、

我が国がこの世界を支配しますがね。

大人しく精霊のもとへ案内して頂ければ

我々も手荒な真似はしませんか？」

「貴様等のような連中に精霊を渡す訳にはいかん！！」

「ふ、そうですか。

それでは自分達で探しますよ、

あなた達を殺してね！！」

アルバドの合図と共に他の兵士達が構えた。

それに合わせてジグマール、ゲミル族の男達も構えた。

「逃げても構いませんよ？

無駄ですけどね！！」

「あ、あ・・・」

突如目の前で始まった戦いに、儼は体が震えた。

早く止めなければ一杯人が死んでしまう・・・

どうすればいいのか何とか頭を働かせた。

母はまだ来ないのか辺りを見回す。

いた。

母だ。

母と共に数人の大魔法使いと呼ばれる村人が数人やってきた。

「あなた達、一体自分達が何をやっているのかわかってるの!？」

母は戦いを始めている相手側に問い掛けた。

「これはジグマール様の御息女のカレン様ではありませんか。」

「あなた、何故それを!？」

ジグマールは外の世界でも有名な大魔法使いであつたが、その娘である母の存在は村の外には一切知られていない。

はずであつたが、何故かこの男は知っている。

一体何故・・・

「ふふふ、まだわかりませんかねえ。

ではこれを見てもらいましょうか・・・」

そうアルバドは言うと、後ろから一人の男が現れた。

「な・・・!？」

その男を見た瞬間、儼も村人達も凍りついた。

「あ、あなた・・・？」

見間違うはずがない。

あれは僕の父のラルフだ。

もう頭が混乱して、状況を把握出来ない。

「やはりお主じゃったか！！」

裏切り者は！！」

「裏切り者？」

それは違いますよ義父上。」

「あなたが何故そこにいるの！？」

誰もが思った事を母が先に問い掛けた。

「カレン・・・」

オレと初めて会ったときの事を覚えているか？

あの激しい雨の日を・・・」

「覚えているわ、忘れるはずもない・・・」

村の外にボロボロになったあなたが倒れていた日の事を・・・」

「そうだ、そしてたまたま村の外にいたオマエに助けられたんだよな。

そして外の世界のオレに、オマエは優しくしてくれた。

オレはオマエのそんな優しさに心引かれ、家族になった・・・

それから外の世界のオレに冷たかった村の住人も優しく接してくれたよな？

そこでオレはやっとこの村に認められ、この村に住む事に許しを得た・・・」

「・・・そうよ。」

「だがな、これは始めから仕組まれた事なんだよ!!」

オレはクルクート国の者であり、オレに課せられた任務は

この村で貴様等の信用を得、そして今日というこの日のために  
村の結界の解き方を調べ、結界を解き、

アルバド様をこの村に招き入れる事なのだ!!」

「そんな・・・」

母は泣きながらその場に崩れ落ちた・・・

儂も父のそれを聞いて母と同じで崩れ落ちた。

儂と母を愛してくれた父の突然の裏切り。

今までの愛は全部嘘だったの・・・？

「この外道があ!!」

祖父の放った光の矢が父を貫いた

「ぐ」あ!!」

「いや————!!」

母の目の前で父はあっけなく殺された。

「まあラルフの役目は終わりましたし、

丁度良かったですよ、ゴミ掃除を手伝ってもらってね。」

そのアルバドの台詞を聞いて







「さあどのように死にたい？珍獣」

「オレは死にたくないし、珍獣でもねえ！！」

「ほざけ珍獣！！」

デジユンはまた蹴り飛ばされた  
そしてデジユンが落ちた先には・・・

「くっそお、また蹴り飛ばされたぜ・・・ん？」

足の裏に何か不愉快な感触があつた。

「な、これは人間！？」

そこにはアシユラに細切れにされた人間のパーツがいくつも落ちていた。

「貴様もそのようになりたいか？珍獣」

「てめえ・・・これじゃオレの村と同じじゃねえか・・・」

「ああ？聞こえんなあ！！」

アシユラはものすごいスピードでデジユンに向かった。

「なんでオマエ達はこんな事をするんだあ！！」

ドゴッ！！

鈍い音でアシユラの顔面にデジユンのパンチが決まった。



スラップはその不思議な声ができる方へ導かれるように歩いた。

## 第八話 決着！！受け継がれたその力

「まぐれで当てたくらいで良いきになるなよ、珍獣」

アシユラは口に溜まった血を吐き捨て、  
剣を構え直した。

「オマエは何者だ！！  
何でこんな惨い事をする！！」

「オレに一撃をくれた礼に教えてやろう。  
オレはアシユラ・・・  
この世界の王であるガイア様直属四天王の一人である。」

「四天王・・・やはりガイアの手下か！！」

「これが命令なんだよ。  
貴様等のような下等生物に拒否権は無い！！」

「オマエが・・・オマエらが・・・！！」

デジユンの体から黄色いオーラが噴き出した。

「こいつ・・・珍獣がどうしたのだ！？」

「うおあああああ！！」

「どうした！！何故動かん！？」

デジユンの気迫に気圧されたのか、  
アシユラは向かってくるデジユンを避ける事が出来なかった。

「だあああああつ!!」

身動き出来ないアシユラにデジユンは無数の乱打を与えた。

「ぶ、ぶるあああ!!」

「これでえラストオオオ!!」

デジユンの渾身の一撃が決まった  
と思いきや、やられたのはデジユンだった。

「く・・・、何だあれは・・・!？」

「つくつく・・・ははははは!!」

アシユラの体には無数の触手が生えていた。  
それはとても禍々しく、見るものに恐怖を抱かせるものであった。

「貴様のような下等生物にオレの真の姿を見せる事になるとはな・  
」

そう告げるとアシユラの体はみるみる大きくなり、異形の姿に変貌  
を遂げた。

それに従い無数の触手が醜く動き出す。

「マジすか・・・」

そう呟いた瞬間何かがデジユン目掛けて飛んできた。

「はぶっ!!」

デジユンの体はアシユラの触手に捕まれた。

そしてその触手はどんどんデジユンを締め付ける。

「あぐっ、ぐぐぐぐ・・・」

「ハハハハ、そのまま内臓を口から吐き出させてやるよ!!」

「ぐ・・・ぐぞっ!!」

意識が朦朧とし、もうダメかと思った瞬間

ドサッ

「ゲホっゲホっ!!」

「無事かデジユンよ!!」

どうやら切れた触手と一緒に地面に落ちたようだ。

「リアナ!? オマエが助けてくれたのか?」

「・・・お主は早よ逃げるがよい。」

「は? 何言ってるのさ!?」

「これはこの村の問題じゃ、お主は関係ない。」





ある誕生日、母は私にいくつもの直径3cm程の丸い石をくれた。

「これはね、魔石というのよ。」

「マセキ？」

魔石と呼ばれた石は淡い蒼色をしていて、とても美しかった。

「この魔石には古代より、ゲミル族による魔法が封じ込まれていてね、

魔法の詠唱が苦手なあなたでも簡単に魔法が使えるのよ。」

「それは便利じゃ！！

でも何でみんなはこんな便利なものを使わないのじゃ？」

「魔石というのはゲミル族なら、誰でも詠唱を短縮させて魔法が使えるぶん、

魔力を大量に消費するものなの。普通のゲミル族ならすぐに魔力が尽きてしまうわ。」

「だからみんなは使わないのじゃな。

でもそれじゃ僕も使えないのでは・・・？」

「あなたは大丈夫。

あなたはみんなよりも魔力が高いから・・・。」

今ならわかる・・・

魔力が高いのは母譲りだからだろう。

そして魔法の詠唱を唱えてもうまく発動しないのは儂の血にゲミル族以外の血が混じっているからだ．．．

母はわかっていたのだ、儂が魔法をうまく扱えない理由が……だから儂に魔石を託したのだ……

だがあのとき、その魔石、母譲りの魔力が原因で儂が暴走したもの  
事実……

もう二度と魔法は使わないと心に決めた……

しかし今はそんな事を言っている場合ではない。

儂が魔法を使う事によって、村のみんなが助かるのならば……

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「属性『風』、レベル『5』、発動！」

そうリアナが叫ぶと、右手に握られた玉が光だし、玉から放たれた風の刃がアシユラ目掛け飛んでゆく。

「ま、魔法！？！」

「オマエ、ゲミル族なのか!？」

「何をしておる！！早よせんか！！」

「あ、ああ、わかった！！」

風の刃がアシユラの体を切り刻み、  
青色の血が噴き出す。

「ちい！！あの小娘、魔法が使えるのか！！」

「おおああああああ！！」

「な！？」

リアナの魔法に気を取られ、  
デジュンに気付かなかったアシユラは渾身の一撃を食らう！！

「ぐぶるああああ！！」

「今度こそやったか！？」

「いや、まだじゃ！！」

アシユラの傷口から触手が生え始め、  
もう触手だらけの悍ましい生物になってしまった。

「貴様等下等生物にイイイ！！ヤラれルワケニハアアア！！」

「おいおい、こんなどうしろってえのよ・・・」

「まだ・・・まだ諦める訳にはいかぬ！！  
属性『火』、レベル『10』発動！！  
属性『水』、レベル『10』発動！！」

リアナの魔法がアシユラに炸裂するが、  
ダメージを受けた部分にまたいくつもの触手が生える。

「アアアアアアアアアアアアアア！！」

アシユラの無数の触手が村の建物、残っている村の住人を攻撃する。  
触手が触れるだけで建物は粉々に砕け、  
触手が締め付けるだけで住人の骨は砕け、内臓が潰れる。

「なんで・・・なんでこんな事をするのじゃ・・・  
農等や、この村の住人が何をしたというのじゃ・・・」

「くっそ！！」

どうすればいい・・・どうすれば奴に勝てる・・・」

「流星落！！」

突然空からアシユラの脳天向かって、スラップのかかと落としが決まった。

「アグアアグオ！！」

アシユラは凄まじい雄叫びを上げるが  
割れた頭からはまた触手が生える。

「スラップキタ（。。（！！」

「待たせたな！！パワーアップしたオレ様が帰って来たぜ！！」

「オマエ今まで何やってたのさ！！」

「それはこの化け物倒してから話してやるよ。

デジユン、リアナ、お前等は下がってろ！！」

「下がってろってオマエ・・・

そいつは触手でうねうねで、すぐ再生するんだぞ！？」

「言ったる？パワーアップしたって！！」

この威圧感、ハツタリではなく本当にパワーアップしたんだ、デジユンはそう体で感じた。

「一撃でカタ付けてやるぜ！！」

スラップは拳に気を溜め始めた。

「デジユン！！」

これが大会のときにオマエに食らわす予定だったオレのとおっておきの必殺技だ！！」

スラップの凄まじい気を感じたのか、アシユラの無数の触手がスラップ目掛け飛んでくる。

「行くぜ！！」

無敵流！！牙神突！！」

アシユラに向かって物凄いスピードで向かう。  
スラップの拳に触れる触手は跡形もなく消滅し、  
それでもスラップのスピードは揺らがない。

「消えろおおおお!!」

アシユラの腹に正拳が決まった。

「キサ、マら、はコレデガイア様ノ敵トミナサレタ・・・!!」

「上等だ、オレ達はそのために戦っている!!」

「クハハハハ・・・セイゼイソノヒマデ悔いのナイよう生きノビル  
ガイイ!!」

そう言い残すとアシユラは触手同様、  
跡形もなく文字通り一片の肉片すら残さず消滅した。

「スラップすげえええ!!」

「一体どうしたんだオマエ!？」

デジュンはまじまじとスラップを見たが、  
特に変わってる訳でもなく、ただのスラップだった。

「ああ、大地の精霊の力を得たんだよ。

まさかここまでパワーアップするとはな・・・」

「マジかYO!!」

「一体どうやってだ!？」

「オレもパワーアップ出来るのか!？」

「後で話してやるよ。」

それより、酷いなこの有様は・・・」

スラップは辺りの死体を見ながら言う。

「ああ、罪もない人を何人も殺しやがって・・・

ガイアの野郎絶対許せねえよ・・・」

あつ！！と思い出したようにデジンはリアナの元へ歩み寄る。

「リアナてゲミル族なんだろう？魔法で生き返らすとか出来ないのか？」

「ゲミル族、リアナが・・・？」

「ああ！！すんげえんだぜ！！

魔法があればみんなを生き返らす事くらい・・・」

リアナの涙を見た瞬間デジンは自分の無神経さに気が付き、自分の発した軽はずみな言葉に悔いた。

「魔法は・・・魔法は完璧じゃないのじゃよ・・・」

「リアナ・・・？」

「ゲミル族なんて、決して優れてる訳ではないのじゃ！！魔法が使えるだけで、タダの人間と変わらない！！魔法だって何でも出来る便利な物ではないのじゃ！！」

「すまない・・・オレが無神経すぎた・・・」

その言葉を聞いてか否か、

「く・・・う、うう・・・」

「リアナ・・・」

「・・・う、う・・・、うわあああああああ!!」

リアナは泣いた・・・

父の裏切り、母の死、村の崩壊、  
決して今まで泣かなかった訳ではない。

それでも泣いた。  
泣き続けた。

今までの悲しみを全て吐き出すように・・・



## 第九話 悲しみの痕には

あの戦いの後、オレ達はリアナの家に戻った。  
いや、戻らざるを得なかった。

村の住人達の供養をしようとしたら、  
車椅子に乗ったリアナのじいちゃんが現れ、追い出されたからだ。

オレ達がよそ者だからなのか、  
やはりこの村の住民達はどこかオレ達とは違う人種なのかもしれない……

「落ち着いたか？」

「ああ、済まぬな……」

「あゝいや、オレが無神経な事言っただのが悪いんだし……」

「気にするな、お主のせいではないよ。  
それより……」

「ん？」

「儂の村を助けてくれて……その……  
ありがとう……」

泣いて目を真っ赤にしたリアナが

デジユンとスラップに礼を言う。

「いやいやいやいや!!」

オレ達は当然の事をしたまでよ?

なあスラップ。」

「ああ。オレ達は奴らの親玉、ガイアを倒すために戦っている。しかし、残念な事に村の人達は助けられなかったがな・・・」

「お主等のせいではない・・・」

そうだ、儂をお主達の仲間にしてはくれぬか?」

突拍子もない突然のリアナの発言に二人は驚いた。

「女の子をオレ達の旅には連れて行けない!!」

「デジユンの言う通りだな。」

オレ達が相手にするのはとんでもない化け物だ。」

「儂は奴らが許せない!!」

村のみんなの仇を討ちたいのじゃ!!

頼む!!この通りじゃ!!」

「そう言われてもな・・・」

「この村に勇者を探しに来たのじゃろ?

勇者探しも手伝うから頼む!!」

「あゝ、そういえばそんな目的だったな確か(笑)」

「デジュン・・・オマエは本っ当にバカだな・・・」

そのとき、リアナの家にあの人物が入って来た。  
そつ、あの全身白タイツの男が・・・

「勇者はキミ達の目の前にいるよ。」

「変態N!!」

「・・・ドクターNだ・・・」

「なんじゃ、この変態は・・・」

「・・・ドクターNだっちゅうのに!!」

やはり初めて見る人にとっては、この全身白タイツは衝撃的なようだった。

「それで変態、勇者が目の前にいるってどういう事だ?」

「言葉通りだ。」

リアナ、キミがその勇者なのだよ。」

やはりこの人物の言う事は衝撃的な事ばかりだった・・・

「ドクター、それは本当なのか?」

「本当だ、スラップ。」

そして君は無事、精霊の加護を受けれたようだね。」

「おかげさまでな、それより詳しく教えてくれ。」

「ああ、キミ達は勇者であると同時に、お互い共鳴し合う力がある。デジユンとスラップの出会いには特に何も無かったと思うのだが、今回はキミ達二人とリアナの力の共鳴を感じたはずだ。」

「言われてみれば、僕は何か不思議なものを感じたのう・・・」

「まだ君達は勇者の力はほとんど無いに等しいので共鳴する事は出来ないが、

近くに精霊が存在する事によって勇者の力は増幅され、力の共鳴が可能だ。

そしてスラップ、キミは精霊の加護を受けた際に感じたはずだ。勇者としての力の共鳴が大きくなるのを・・・」

「今回オレは土の精霊の力を得た。

そのとき確かにデジユンとリアナの力の共鳴を強く感じた・・・」

「

「私は特別なセンサーが内臓されててな。

そのセンサーのおかげで大まかではあるが、

勇者の力、精霊の力を感知することが出来るのだよ。」

「それで今回、お主等はこの村に辿り着いた訳じゃな。」

「みたいだなあ、変態Nも役に立つじゃないか（笑）」

「・・・次の目的地は決まっているのでそこに向かって欲しいのだからいいかね？」

「わかった、次はどこに行けばいい？」

「次はカイリーン海域の底に行ってくれ。  
そこに精霊がいるはずだ。」

「いや海の底なんてどうやって行けばいいんだよ！！」

「安心したまえデジュン、ちゃんと手は打ってある。  
とりあえず明日の正午、先にユビナメ村の船の前で待っていてくれないか。」

「了解だ、何か海に潜る策があるんだなドクター。」

「任せておけ諸君。」

「それでは明日ユビナメ村で落ち合おうぞ！！」

「ボムッ！！」

「ぶほぶほ！！あの変態はいいかげんにしろよ！！」

「ごほう！！いつもこうなのか？あのドクターNとやらは・・・」

「ああ、すまないな。」

「いつもああなんだドクターは・・・」

「困った奴じゃのう・・・  
ところで・・・」

「あん？」



「そんな過去があつたのか・・・」

「すまぬな、どうしても結界の外に住む以上、ゲミル族と知られると面倒な事になりかねぬ故なのじゃ。」

「それはしょうがないぜ、オレだってそんな事があつたら隠すもん  
な。」

「オマエは見たまんま不思議な生物だろうが。」

「あ？オマエはオレに喧嘩売ってんのかロンゲ！！」

「やるか？精霊の加護を受けたこのオレと。」

「くう・・・オレが精霊の加護を受けたら必ず仕返しするからな！  
！」

「やはりおもしろいのうお主等は・・・  
儂は純粹なゲミル族ではないので魔石が無ければ魔法は使えぬ。  
だが足手まといにならぬよう頑張る故、よろしく頼むぞ！！」

「おう！！こちらからもよろしくだぜ！！」

「ああ、またこんな悲劇が起きない様に頑張ろうな。」

「さて、出発は明日のようなので、儂は少し村に行ってくるぞよ。」

「ん？じゃあオレも・・・」

デジyunはリアナを追おうとしたが、





母上・・・

やっとこの村に眠らせてあげる事が出来ます・・・

リアナは村の隅に小さな墓を作り、花を添えた・・・

この下には母の遺骨を埋めてある。

簡易的だがちゃんとした墓だ。

そしてリアナの背後に、車椅子に乗った祖父のジグマールが現れる。  
簡易的な墓を見て・・・

「それはカレンの墓か？」

「そうじゃ・・・」

「この村はオマエがいたからこそ、  
被害はこの程度で済んだ。」

「・・・・・・・・」

リアナは振り向かず、背を向けたままである。  
それに構わずジグマールは喋り続けた。

「だからこの村に、村を追放されたカレンの墓を作る事は構わない。  
この村を救ったオマエの母なのじゃからな。」

「・・・・・・・・」

「そしてオマエにはこの村に戻る権利を与える。」

「・・・・・・・・」

「結界が再び破られた今、より強い結界を張らねばならん。  
ワシはもうこの体じゃ、協力してもらえんか。」

「いつまでも外の世界を拒絶し続け、誰も受け入れられないようでは  
この村はそう長くはもつまい……。」

「リアナ!!」

やっと言葉を出してくれたと思ったたら、とんでもない事を言い出した。

この村の歴史、住民、全てを否定する言葉だ。

「オマエは自分が何を言っているのかわかっているのか!!」

「ええ。」

儂はこの村に戻る気はない。」

「オマエはカレンに似、優秀な子じゃ!! 考え直せ!!」

「あなたもわかっているはずでしょう。」

今この世界では何かが起ころうとしているのを……

外の世界に目も暮れずゲミル族という殻に閉じこもり続け、  
魔法という力があるのにそれを世界のために使わず、

そんな人間に、儂はなりたくはない……。」

「あの珍獣達にたぶらかされたのか!？」

「これは儂の意思じゃ。」

もうこんな悲劇を起こさないためにも、儂はあの者達と共に旅に

出る。

「この魔法の力が人々を少しでも救えるのなら僕は戦う！」

「もういいいい、オマエには失望したわ！！」

さっさと出てゆけ！！オマエなどゲミル族ではないわ！！」

「僕はゲミル族ではありません、人間です。」

最後にそれだけを残すとリアナは行ってしまった・・・

そのときのリアナの顔は何か吹っ切れたようなそんな顔であった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

薄暗い大広間でエイスという男は佇んでいた。

何かを感じているかのようにつと……

「精霊の加護……覚醒してしまったか……」

そして突然エイスの体に激痛が走った。

エイスはその場で崩れ落ち、口からは大量の血を吐き出す。

「エイヌ様！？大丈夫ですか！！」

そこに忍装束のような服を纏った、長い金色の髪を後ろで結った女性が現れる。

「ぐう・・・、シャナ・・・？」

「一度お休みになられた方がよろしいのでは・・・」

シャナと呼ばれた女性に支えられ  
エイスは何とか立ち上がった。

「残りの三つの場所はわかったのか？」

「『水』と『風』はわかりました。

『火』はまだ調査中です。」

「そうか・・・」

では『水』にリヴァレ、『風』にヴァファムを向かわせる。  
我々は結界に護られた精霊に手出しは出来ぬが、  
奴等の手に渡らないよう見張る事は可能だから・・・」

「ですが、四天王の二人も向かわせては

この城の警備が薄くなってしまうが・・・」

「心配いらん。

この状況ではしばらくデスミオス共も大人しくしているだろう。

『上』の連中も『鍵』が揃うまでは傍観者を続けるだろうしな・・・

」

「・・・わかりました。」

ではそのように手配をしておきます。」

「それと、オージを見張って置け。

奴等が何を企んでいるのか知るためにもな・・・」

「わかりました。

それでは・・・」

そう大広間から出ようとしたところ、  
思い出したようにエイスが呼び止めた。

「シャナ・・・いつもすまんな・・・」

「いえ・・・

失礼します・・・」

シャナが大広間から出たのを確認した後、  
エイスは再び崩れ落ちた。

「私のやっていることは間違っているのかもしれない・・・  
オマエ達が生きていたら、今の私を見て嘲笑うか？  
それとも・・・」

## 第十話 オージ暗躍

「・・・以上が今の動きです。」

「ああ、ご苦労だったな。」

まったく人気のない海沿いの丘の上で  
オージはシャナの報告を受ける。

「それと、やはりエイスはオージ様について怪しまれておりますが・  
・・」

「ふん、奴相手に怪しまれずに行動するのも無理というもの。  
怪しまれるのは初めから承知の上だ。」

「ですが、このままでは我々の計画に支障をきたす恐れが・・・」

「オレを誰だと思っている？  
オマエはただエイスに近づき、オレに情報を報告すればいい。」

「・・・はい、失礼しました・・・」

「つくづく上の老人共はオレに無理難題を言う・・・  
だが、所詮エイスも『鍵』を狙う身・・・  
この状況でオレに仕掛けるほどバカではない。」

「・・・」

「ところでデジュン達はどこに向かおうとしている？」

「今日の朝、ユビナメ村に向かったようです。」

「次の目標は『水』か・・・」

オマエの報告では水と風に刺客を送ったそうだな？」

「はい、水にリヴァレ、風にヴァファムを送りました。」

「では、風の方に仕掛けてみるか・・・」

「では私が・・・」

「いや、いい。」

暇潰しにオレが直々に行くさ。

丁度あの辺りに発見したのだよ、『適格者』をな。」

オージは不敵な笑みを浮かべシャナを見た。

「それでは・・・」

もう一人の『覚醒』が始まるのですね・・・」

「ああ。」

覚醒後、デジュン達へ近づけてみるか・・・」

「それはあまりにも軽率では・・・」

「くどいぞシャナ。」

オマエはいつからオレに指図が出来るようになった？」

「申し訳ありません・・・」





そこにはうつすらと黄色く輝く少年がいた。

「あんたか、オレの頭に直接話しかけて来たのは……」

「久しぶりだね。」

あ、といつてもキミには以前の記憶がないのか。」

「一体……何を言っている？」

「キミの前世……」

そう、ボク等精霊の加護を得てガイアを封じたとされる  
伝説の勇者の一人『リユーネ』……

キミはリユーネ同様、大地の精霊のボクの力を得てもらった。」

「オレはそのリユーネとやらの転生した姿であるから、  
前世同様あんたの力を貰えるのか……」

「ああ。それにしてもキミはリユーネとそっくりだね。  
格闘術が得意であるところといい、ね……」

そう言い精霊はスラップをジロジロ見る。

「……何が言いたい？」

「なんでもないよ。」

さあ世間話はここまでだ。

キミの仲間が今ガイアの手下と戦っているんだろう？  
手遅れにならない内にボクの手を握って。」

そう言うとき大地の精霊はスラップに手を差し伸べた。

「それだけで精霊の加護とやらが受けれるのか？」

「ああ。

でも、ボク等精霊の加護は所詮キツカケに過ぎない。  
多少パワーアップはするが、その後はキミ次第……」

それを聞き、スラップは精霊の手を握る。

精霊の手はとても暖かく、今まで感じたことのない虚ろな存在に感じた。

「さあ、これで終わったよ。」

そう言われスラップは手を離し、自分の体を確かめる。

「確かに特に何も変化は無さそうだな。」

「そうだね。

スラップ、どうかこの世界を救ってあげてくれ……」

「ああ。

必ずガイアを倒し、この世界を平和にしてみせる……」

「……………」

キミ達は先代の勇者達のように、この世界の真相、未来を知ることになる。

それでも決して挫けずに頑張つて欲しい……」

「世界の真相？

それは一体……うわっ!？」



「しっかし、オマエだけずるいよなあ。

オレがそこに行けばオレが加護を受けれたんじゃないの？」

「いや、その大地の精霊はオレの前世にも加護を与えていたらしい。だからそいつが転生した姿のオレも、前世同様に大地の精霊の加護を受けるのが自然じゃないか？」

精霊が呼び掛けたのはオレだけだったみたいだな。」

「そうじゃのう。

精霊との相性もあり、誰でもいいという訳ではなさそうじゃ。」

「くっそー！！

次はオレが精霊の加護を受けてえなあ！！」

「お？

ほれ、そうこうしているうちにユビナメ村らしきものが見えたぞよ。」

リアナの指差す方向に、村が見えた。

海の近くだけあって船もたくさんあり、漁師達が忙しく作業するのが見える。

「おほー！！

もうそろそろ昼だろ？この村で昼飯にしようぜ！！  
獲れ立ての魚とかうまそうだ！！」

「そうじゃのう。

朝から歩きっぱなしで僕も腹が空いたわ。」

「じゃあ昼飯といくか。」

「おい！！あんたらだよ、その二人。」

「ん？なんじゃ？」

突然、漁師の男に声を掛けられる。

「あんたらだな、丸い珍獣連れた二人組みは。  
全身白タイトの変態からあんたらに手紙を預かっているんだが。」

「な・・・！？

二人組みじゃなくて三人組みだ！！」

怒るデジンを余所にスラップが答える。

「すまない、その変態からの手紙を見せてくれないか？」

「これだ。」

確かに渡したからな、そんじゃ。」

三人は渡された手紙を読んだ。

すまない、少し野暮用で私は同行出来なくなった。

船の手配は済んでいるので、港にある『シェイド丸』に乗ってカイ  
リン海域まで行ってくれ。

そして海底に潜る手段も船長に伝えてあるので、よろしく頼む。  
ドクターNより

「土壇場で怖くなって逃げたんかあの変態は・・・」

「ふむ、あの船ではないのか？」

シェイド丸と書いてあるが・・・」

「な！？」

本気であの船なのか・・・？」

ドクターNより指定されたシェイド丸は

かなりオンボロであり、とても三人は乗りたいとは思わなかった。

「絶対沈みそうな船だよな・・・」

「オラの船が沈む訳あるか！！」

「はぶっ！！」

デジューンはヒゲをもつさり生やした体格のいい男からゲンコツをもらった。

「あんたは？」

「オラはシェイド丸の船長を務めるゴロンだ。

話は聞いている、乗りな。

もちろん昼飯も用意してある。」

「用意がいいな、今回のドクターは・・・」

「失礼じゃが、本当にあの船は大丈夫なのか？」

「お嬢ちゃん、船も男も見た目じゃないんだぜ？」

オラを信用しろ。必ず目的地まで連れてってやるよ。」

「まあいいか・・・」

何か秘策があるんだろうし、乗せてもらうつ事にするよ。  
行くぞデジュン。」

「あ、ああ・・・」

なんでオレはいつもこんな役ばかりなんだ・・・  
デジュンはつくづくそう感じずにはいられなかった。

デジュン達が船に乗る事を遠くから確認する白タイトの人間。

「すまん・・・」

今回は別件で一緒に行く事が出来ん。

なんとか頑張ってくれよ・・・」

そしてデジュン達は精霊を目指しカイリーン海域に向かう。  
ガイア四天王の一人が待ち構えているとも知らずに・・・

## 第十一話 海の底での戦い

「おら、目的のカイリーン海域に着いただよ」

目的地に着き、船長のゴロンはデジュン達の元へ行く。

そこで船長が見たのはぐったりしている二人＋一匹の姿であった。

「おえつぶ・・・もう少し何とかならなかったのか・・・」

「やはりボロい船じゃったな・・・」

「さすがに丸いオレもこの船酔いは・・・」

「なんでえなんでえ!!」

「だらしねえなあ、こんなもんの揺れでよ!!」

「いや、すまない・・・」

「とりあえず目的地には着いたようだな・・・つぶ」

「とりあえず礼は言うぞよ・・・」

「おおよ!!」

「だがこつからオメエ等どうすんだ？」

「見渡す限り海なんだが・・・」

船長の言う通り、周りには島一つ見えず、視界には海しかない。

「確か海の底だったよな・・・  
スラップ、どうすんだ？」



「いや、オレに聞かれてもな・・・」

「この底に精霊がいる・・・!!」

何か感じ取ったのかリアナが呟いた。

「リアナ、分かるのか？」

「ああ、これがお主の言っていた精霊との共鳴なのじゃろうな。確かに何か不思議なものを感じるわい・・・」

「て事は今回の精霊はリアナなのか!!」

・・・またオレじゃないのね・・・（・・・）

「まあそんな気を落とすな。」

しかしどうしたものかね、底に潜る手段が無いしなあ・・・」

「あつ!!」

何か思い出したように船長は船の倉庫に向かった。

「どうしたのじゃ船長は・・・」

すると船長は、人の頭がスッポリ入りそうなガラスのメットを三つ持って来た。

「そいや、白タイツの変態からこれをオマエ等にと預かってたんだわ。」

「なるほど、これがあれば海の底まで行けるな。」

「ホントに用意がいいのう・・・」

「オレは体ごとスッポリ入るんすけどね・・・」

三人はガラスのメットを被る。

「すまないが船長、オレ達が戻るまで船をここに停めてもらっていないかな？」

「当たり前だろ、オメエ等はこの船がなけりゃ村に戻れないしな。」

不本意だが、帰りもこのボロ船に乗らなければならない。

またあの揺れを経験すると思うとぞつとした。

「よし行くぞ!!」

「了解じゃ!!」

「主人公なのに、最近はスラップが仕切ってるなあ・・・」

三人は同時に海へと飛び込んだ。

まだ見ぬ精霊を求めて・・・

しばらく潜っていると、ある祠が見えた。

（どうやらアレのようじゃな・・・）

共鳴がどんどん大きくなるわ・・・)

祠に入ってみると、そこはぽっかりと空洞になっていた。

「どうやらここには空気があるみたいだな。

しかし、あんな窮屈なメットに体が丸ごと入ってたらしんどいわ・・・」

「オマエはそうだろうな。

だが服がビショビショだ、風邪引かないうちにさっさと済ませようぜ。」

どうだリアナ、精霊との共鳴は？」

「どんどん大きくなってるぞよ。

ここで間違いない。」

リアナはキョロキョロすると、ある一点を指差した。

「あそこじゃ。あそここの奥に精霊がいる。」

リアナが指差した先に、

大きな胸がこぼれ落ちそうな程露出が激しい派手なボンテージ姿の女性が見えた。

「あれか？あんなもんなのか精霊で。

かなり派手なお方ですが・・・」

「いや違う・・・

オレが見た精霊はもっと不思議な感じがしたが・・・  
てか普通に考えてあんな露出する精霊ておかしいだろ。」

「何者じゃお主は!!」

「ふふ、あなた達を抹殺する者よ・・・」

そう言うとなは水で作り出したいくつもの刃を三人に投げつけた。

「あぶねえ!!」

「なんだあの女は!!」

「どうやら精霊ではないらしいな。

ガイアの手下か!？」

「あははは!!」

あたしは四天王の一人、リヴァレ!!

あなた達に精霊を渡すわけにはいかないわ!!」

「破廉恥な女め!!」

儂等の邪魔をするというのなら容赦はせぬぞ!!」

リアナは腰の袋から魔石を取り出した。

「この田舎娘が!!」

アシュラを倒したくらいでいい気になってんじゃないよ!!」

「田舎娘か・・・」

ふ、お主面白いのう。

ではその田舎娘の力を見せてくれるわ!!」

「お、女同士の争いだわ・・・」

「やばいな、デジュン離れたほうがいい。」

スラップはデジュンの手を掴み、急いで二人から離れようとした。だが時既に遅し、リアナとリヴァレの攻撃が炸裂し、二人はその爆風で吹き飛ばされた。

「く!!これがゲミル族の魔法か!!」

「いやこれはアシュラ戦より凄まじいぞ!!」

お互いの攻撃後の煙から二人の姿が見えてきた。ほぼ同威力で相殺されたのか、共に無傷である。

「やるわね田舎娘!!」

少し侮っていたわ・・・」

「まだまだこんなものではないぞよ!!  
消し去る前に聞きたい事がある。」

罪の無い人々を無差別に殺し、お主等は一体何が目的じゃ?」

「あたしを消し去るなんて無理だと思っけど。」

それにしても罪の無い人・・・ねえ。」

「そうだ!!クリーチャーを操り、オレの村を破壊しやがって!!  
ガイアの目的はなんだ!!」

「く、あはははは!!」

クリーチャーを操り、罪の無い人々って笑わせないでよ。  
あなた達、本当に何も知らないのね。

それでも本当に勇者の転生なの？」

「なんだと・・・？」

「コケにしゃがつてえ！！」

村のみんなの仇だ、行くぜえ！！」

デジンはリヴァレに向かって行った。

「あなた達ではあたしは倒せないわよ。」

スカッ

「はぶっ！！」

デジンの猛攻空しくリヴァレをすり抜け、地面に落ちてしまった。

「すり抜けた・・・何をやった！？」

「なあんにも？」

言ったでしょ、あなた達じゃあたしの足元にも及ばないのよ！！」

リヴァレは振り上げた右手から無数の水の刃を飛ばした。

「危ない！！」

リアナはデジンとスラップの前に行き、魔法でバリアを作り出した。

「すまねえ、助かったぜ・・・」

「あやつには何かタネがありそうじゃな。」

「今度はオレがやってみるさ。」

この大地の精霊の力でな!!」

スラップはバリアの中から抜け出し、空高く舞い上がる。

「はああ!! 流星落!!」

しかしそれでもスラップの攻撃もすり抜け、  
リヴァレが立つ地面に大きな窪みを作り出す。

「ふふ、直撃したらさすがのあたしもやばいわね。」

「オレの攻撃でもダメか・・・」

「おい、何か体が・・・」

「どうしたのじゃデジュン？」

う・・・!!」

「やっと効いてきたわね、特性の麻痺薬よ。」

この部屋に来た時に薬をバラ撒いておいたの。」

「き・・・たねえ事しやる・・・!!」

「しかしお主もバカじゃの・・・」

致死性の毒ならすぐに勝負は着いたというのに・・・」

「すぐお終いはつまらないでしょ？ ジワジワと拷問しながら殺してあげるわよ。」

「見た目通り女王様気取りかよ・・・悪趣味な女だな。」

「あなたは美形だから最後にじっくり可愛がつてあげるわ。簡単にイけるなんて思わないでね・・・」

まずは・・・そうね、丸い珍獣からいこうかしら。」

「オレかYO!!」

なんでいつもオレばかり・・・」

「あなたは焦らさずすぐにイかせてあげるから心配しないで。」

リヴァレは倒れているデジユンの頭目掛けて水の刃を突き刺そうとする。

「ああああ!!死ぬ～～!!」

「デジユン!!」

間一髪、スラップが水の刃を掴みデジユンは一命を取り留めた。

「助かったぜスラップ・・・」

「ああ、だがこれはさすがにまずいぜ、オレも体が動かなくなってきたやつた・・・」

「二人仲良くイキたいのならそうしてあげましょうか?」



リヴァレは水の刃をスラップとデジュンの両腕に刺した。

「ぐあう!!」

「このアマ・・・!!」

「それでまだ体を動かせたとしても  
両腕は地面に水の刃で刺さってるから  
私に攻撃することや逃げられる事も出来ないでしょ？」

「く、デジュン、スラップ・・・」

「リアナ!! オマエは逃げろ!!」

ここで三人殺されたらもう取り返しが着かない!!  
せめてオマエだけでも・・・」

リヴァレは騒ぐスラップの右足に水の刃を刺した。

「ぐあ!!」

「逃がさないわよ、あの田舎娘もね。」

さあそろそろ二人の頭にブスッとイキましようか。」

「あ、ああ・・・」

儂はまた大切なものを目の前で失うのか・・・  
そんな事は嫌じゃ!!  
じゃがこの体では魔石を取り出す事が・・・  
魔法詠唱、それしか・・・

出来るのか？今の儂に・・・

やるしか・・・ない！！

リアナはそう決意し、魔法の詠唱を行い始めた。

「っ！！」

リヴァレは後方からプレッシャーを感じ振り向いた。

そこで見たのはリアナの体から発せられるとてつもない魔力のオーラだった。

「なっ、シャナの情報では田舎娘は

魔石無しでは魔法は発動出来ないはずでは・・・！？」

（魔力が高まるのがわかる・・・

よくわからぬがこれはいけるぞよ！！）

「おいスラップ！！

リアナがすごい魔法を撃ちそうだぞ！！

これは期待していいんじゃないのか？」

「ああ、だがこの状態ではオレ達も巻き添え喰らうんじゃないか？」

「あ・・・」

そんな事を言ってる間にリアナはリヴァレに向けて光の球を撃った。

「くっ！！そんな魔法がああ！！」

リヴァレは光の球を打ち消すべく、無数の水の刃を放ったが  
それでもリアナの魔法は揺らぎもせず真っ直ぐにリヴァレに向かっ  
て行く。

「おい！！マジかよ！！」

オレ等もいるんだぞ！！」

「リアナを信じるデジュン・・・」

「オマエが巻き添え喰うって言ったんだろおがぁ！！」

「この田舎娘がぁぁぁぁぁ！！」

チユドオオオオン！！

「やった・・・のかのう・・・」

そこにはデジュンとスラップしか存在せず、  
リヴァレの姿は無かった。

「どうやら無事のようなオレ達・・・」

「オレの言った通りだろ？」

だがどうやらあの女は物理攻撃はダメでも魔法攻撃は効いたみた  
いだな。」

「儂にも魔法詠唱が出来た・・・  
いや今は体の毒を解毒せねば！！」

リアナは魔法で自らの体の毒を抜いた。  
そしてデジュンとスラップの毒も抜き、  
二人の体の傷も回復させた。

「サンキューなリアナ！！  
オマエの魔法のおかげで助かったぜ！！」

「だがいつにも増して魔法が強力だったな？  
近くに精霊がいるから力が増幅されているというのか。」

「かもしれぬ・・・  
魔石無しでも魔法が使えたのもそれが理由かもしれぬ・・・」

「よっしゃ！！ガイアの刺客も倒した事だし、  
さっさとリアナに精霊の加護を与えてもらおうぜ！！」

「そうじゃな、まあ難しい事は後からでもいいじゃろう。」

三人は精霊がいると思われる祠の奥へ進んだ。

## 第十二話 疑問

薄暗い祠の中を三人は精霊求めひたすら進む。

「どうだリアナ？」

結構奥まで来たが精霊は感じるか？」

「ふむ、共鳴はかなり強くなっているぞよ。もう少しじゃ」

「しかし驚きだよな。」

いつのまにか魔石なしでも魔法使えるようになってるじゃん」

デジyunはリアナの魔法を放つ真似をしてみせた。

「あれは儂の力だけではないぞよ。」

あんな高レベルの魔法は魔石を使用しても扱えぬしな・・・  
これも精霊との共鳴がなせる業かのう。」

「て事は精霊の加護を受ければ今よりもっとパワーアップするてことか？」

いいなあ・・・オレも早く欲しいぜえええ!!」

「おい、どうやら着いたみたいだぜ。」

スラップは奥のぼんやりと光るものを指差した。

「ふむ、どうやら儂だけに来いと言ってるようじゃ・・・  
すまぬが、しばし待たれよ。」

「ああ、じゃあオレ達はここで待ってるよ。」

「オレ、精霊見たことないから見たいんだがなあ・・・」

二人を置いてリアナは精霊の元へ歩む。

「確かに精霊というだけあって凄まじい生命力を感じる・・・  
じゃが、何か迷いのようなものが・・・？」

『サラ・・・』

「！！！」

目の前の一人の女性が現れた。

肌は青く、とても美しい・・・

リアナは彼女が精霊だと直感的にわかった。

「儂の名はリアナ、リアナ」フェズリールじゃ。  
お主が精霊か？」

「そう・・・私は水の精霊・・・  
今はリアナという名なのね・・・」

あなたがここに来た理由は分かっています。  
私の、精霊の加護を得たいのでしょうか？」

「そうじゃ。」

儂等はこの世界を滅ぼさんとするガイアを倒すために・・・  
そのために力を貸して頂きたい！！」

「ガイア・・・ファルステアの神・・・」

「あなた達はこの星の神を倒すつもりですか・・・」

「神じゃと・・・？」

「ガイアはこの星の創世より存在する神、  
あなた達はそれに立ち向かおうとしているのです。」

「ガイアが神じゃと？冗談ではない！！  
あれは悪魔じゃ！！人間に害をもたらす悪魔じゃぞ！？  
一体お主等精霊は何を知っているのじゃ？  
知っている事があるのなら教えてほしい！！」

「・・・」

答えは私からは言えません。

しかしあなた達はいずれ真実を知る事になります・・・」

「一体何を・・・」

「まず勇者を四人全員揃え、四人の精霊の加護を得ること・・・  
その後ガイアの元へ向かいなさい、この世界の真実を知るために・・・」

そう言うと、水の精霊はリアナへ手を差し伸べた。

「さあ私の手を取りなさい。

そうすれば精霊の力を得ることになります。」

リアナは黙ったまま精霊の手を握る。  
すると、リアナに不思議な力が流れ込んでくる。

これが精霊の加護を受けるといふ事なのか・・・？

「さあ終わりました。どうですか感じは？」

「何か不思議な感じじゃ・・・」

僕は以前も同じような事があったような気がする・・・」

「そうですか・・・」

もう時間が来ましたが、リアナ・・・」

「！？体が・・・？」

精霊の姿がゆらゆらと揺らいだ。

それは蜃気楼のように、今にも消えそうである。

「少し力を使いすぎてしまいました・・・」

またしばらく眠りにつきます・・・」

「すまぬな、僕のために・・・」

「いえ、これも運命でしょう。」

それではリアナ、決してこの世界に失望せず  
頑張ってください・・・」

そう言い残し、精霊は消えてしまった。

「僕等が知らない何かがあるのじゃな、この世界に・・・」





どうやらやるべき事が終わったようだな。」

「ああ、ありがとう船長。

ユビナメ村までも頼むよ。」

「あいよ、飛ばすんでしっかり捕まってるよ!!」

スラップの言葉を聞き、ゴロンはすぐ船の操縦に向かった。

「いや、出来ることならゆっくりお願いしたいのじゃが・・・」

「聞いてねえぞあいつああああああ!!」

デジュンの言葉の途中でシェイド丸はもの凄いスピードで村に向かった。

「おおおおお!!」

早すぎるってええええ!!」

もの凄いスピードのおかげで、かなりの短時間で村に着いた。

「おえええ・・・」

加減てものを知らないのかい・・・」

「デジュン!!」

そんなこと言ってる場合じゃないぞ・・・」

「あん?何よ。」

「これは・・・一体何が起きたのじゃ・・・」

先に船から降りたスラップとリアナが呆然としている。  
デジユンはその二人の姿を見て何か嫌な予感がした。

船から降りた先には、思ったとおりの事が起きていた。

「おい・・・何だよこれ・・・」

そこには何匹ものクリーチャーが村を襲撃していた。  
その姿は虫や鳥、獣と様々であった。

建物は破壊され、死体がいくつも転がっている。

「二人とも、まだ生存者がいるかもしれない！！  
クリーチャーを倒し、生存者を探すぞ！！」

「了解じゃ！！」

スラップとリアナは急いで村へと向かう。  
だがデジユンはそこから動けないでいる。

「オレの村のようにつももの人が殺されていく・・・  
なんで、なんでなんだよ・・・」

- - - - -

クリチャーを倒していくスラップとリアナ、  
精霊の加護を得た二人の前にクリチャーの屍の山が出来上がって  
いく。

「こいつら強さ自体はたいしたことないが数が多すぎる……！！  
これじゃ生存者を探すどころじゃないぞ……」

「そうじゃな．．．このままでは儂の魔力もすぐ尽きてしまうわ．．．」

そんなとき、どこからか子供の声があった。

「!？」

「まずい！！あの子供クリーチャーに囲まれている！！」

「ここからでは間に合わないぞよ!」

まだ10歳にも満たない少女へとクリーチャー達は一斉に飛び掛かる。

[illegible]

「二人が戦っているのにオレは何をしているんだ……」

「アナタガタタカウノハナゼ？」

「みんなを守りたいから……」

『アナタノソノテハ、ナンノタメニアルノ?』

「みんなを守るために……」

□ アナタハオリジナルノ・・・ □

!!

☞ コノセカイデモアナタハ・・・ ☜

「そうだ！！」

オレは戦う！！この世界も滅ぼさせないために！！」

デジューンはクリーチャーに襲われそうになっている少女へと物凄いスピードで向かった。

その場から少女への距離は100m程であつたがまさに一瞬だった。少女の回りにいたクリーチャーが一瞬で消滅したのだ……

「今は・・・デジュン・・・？」

「クリーチャーが肉片一つ残さず消滅・・・  
デジュンにあんな力が・・・」

「嬢ちゃん、大丈夫か？」

少女は恐る恐る目を開け、回りを見出した。  
先程まで自分を襲おうとしていた化け物は消え、  
代わりに丸い珍獣がいた。

「え・・・丸いお兄ちゃんが助けてくれたの・・・？」

「ああ。嬢ちゃん、お父さんやお母さんは？」

「まだ家の中に・・・」

そう言つと少女は燃え盛る家を見た。

「あそこか・・・」

わかった、スラップとリアナはこの少女を見ててくれ！！」

「火の勢いが強すぎていつ崩れるかわからない。  
気を付けるよデジュン！！」

デジュンは無言で頷き、少女の家へ向かう。

そしてデジュンが突入して5分経つただろうか。  
その家は凄まじい音を立てて崩れていく。

「お兄ちゃん!!」

「大丈夫ぞよ、デジユンなら・・・」

リアナは少女を抱きしめ言う。

しかしリアナも少女と同様心配であつた。

だがデジユンは無事、崩れた家の中から現れた。  
二人の夫婦を背負つて・・・

「パパ!! ママ!!」

少女は父と母に抱きついた。

そして父と母も自分の娘を強く抱きしめる・・・

「ああ、なんとお礼を言つていいのか・・・」

「ありがとう、丸いお兄ちゃん!!」

「良かったな、お父さんとお母さんが無事で。」

（父親と母親か・・・

オレがもつとしっかりしていればオレの親も助かったのかな・・・

）

「リアナ、この子のお父さんとお母さんの火傷を治す事、出来るか？」

「出来るが、お主の火傷の方が酷いのでは・・・」

「オレは大丈夫だ、先にこの二人を頼む。」

「了解じゃ、では・・・」

リアナは両手を二人の前に持つて行き、魔法詠唱を始めた。

リアナの手から発せられる不思議な光を浴び、二人の火傷は見る見る内に消えていく。

「これでOKぞよ。」

「本当にありがとうございます・・・  
ここまでして下さるなんて・・・」

「いってことよ!!  
オレ達はそのために戦っているんだし・・・」

そう言い、デジyunはスラップとリアナに向き直る。

「まだ他にも生存者がいるかもしれない。  
手分けして探そう!!」

「ああ、まだクリーチャーがいるかもしれない。  
あんた達はなるべくオレから離れないようにしてくれ。」

スラップは三人の親子と共に他の場所を探す。  
そしてデジyunとリアナは・・・

「あつつつつ・・・」





「この村ももう終わりです・・・」

我々は他の村に移住しようかと思えます・・・」

「そうか・・・」

あまり力になってやれなくてすまない・・・」

謝るスラップに住人達は首を振る。

「いえ、そんな事はありません・・・」

あなた達がいたからこそ我々は生き延びられたのです・・・」

そして住人達は村を出る支度を整える。

「もうこんな事は二度と繰り返させない・・・」

「デジュン・・・」

「そうじゃな・・・」

そのためにも儂等が頑張るしかないのじゃ・・・」

（ガイア、クリーチャー・・・）

もしかしたらオレ達は何か勘違いしているんじゃないか・・・？  
それにあの声・・・何か、何かが引つ掛かる・・・）

### 第十三話 ハンター

薄暗い部屋のベッドの上に横たわるエイス。

そしてエイスの下半身にまたがるシャナ。

二人は裸のまま重なり合い、シャナはエイスの上でゆっくりと上下に動く・・・

「ん、エイス様・・・」

「・・・・・・・・」

シャナは熱を帯びた体を淫らにゆっくりと、ときに激しく動かすが、エイスは何も反応を示さず、いつもの冷たい表情のままだった。

「エ・・・イス様・・・？」

「もういい、降りろ・・・」

そう言いエイスはシャナをどかせ、ベッドから降りた。

「エイス様・・・」

「オマエの心の中には私とは別の男が映っている・・・」

「・・・・・・・・」

エイスは服を着直し、背中を見せたまま続ける。

「その男も私は誰だか知っている。

貴様が何のために私に近付いたのかもな・・・」

「私は・・・それでも、あなたが・・・」

シヤナは顔を伏せ、呟いた。

そのときだった、エイスの部屋にあるスピーカーのような物から着信音が鳴ったのは。

「なんだ？」

「お休みの所失礼します！！

エイス様、大変な事が起きました！！」

「申してみる。」

「リヴァレ様とヴァファム様が・・・

リヴァレ様とヴァファム様が倒されました！！」

「なんだと・・・？」

「その場にいた兵によりますと、

リヴァレ様はデジュン一行に。

ヴァファム様は謎の三人に敗れたとの事です・・・」

「謎の三人・・・」

「詳しい事は不明ですが、

それぞれ銃、棺桶、そして巨大な剣を持った三人との事です。」

「その三人をマークし、風の場所は今後も見張っておけ。それと、この話は隊長クラスのみとする。」

『了解しました、それでは・・・』

通信は消え、エイスはその場で考え込む。

（リヴァレがデジュン達に倒されるのは有り得るとして、ヴァファムを倒せる人間がこの世にいるとは・・・

まさかそこにデジュン達以外の『適格者』・・・いや、『超越者』の方が？

適格者だった場合、風はもう手遅れだな・・・）

「シャナ」

「はい・・・」

「兵に『火』の搜索を急がせろ、それとオージを呼び戻せ。」

「了解しました・・・」

まだ服を纏っていないシャナを残し、エイスは部屋を出た。

「私はどうしたらいいの・・・？オージ・・・」



「!!」

熱くなるデジユンを静めるように、リアナは手をデジユンの頭に乗せた。

「分かっている・・・分かっているのじゃ。

じゃがエイスやオージ、そしてガイア・・・

奴等を止めねばならんのは確かじゃが、

それだけではこの戦いは終わらない気がするのじゃ・・・。」

「かもしれん・・・

だが何も分らない以上は今出来ることをするしかないな。」

「今度こそはオレが精霊と会う番だろ？

そのとき無理矢理でも聞き出してやるさ!!」

「その意気だデジユン!!」

突然の声に三人は辺りを見回す。

「聞き覚えあるぞよ、この声は・・・」

「やっと現れたか変態め・・・」

呟くデジユンの後ろに、その男は現れた。

「ふむ、どうやらリアナは精霊の加護を得たようだな。」

「ああ、あとはデジユンの精霊、最後の勇者とその精霊だけだ。登場が遅れたからにはちゃんと情報は仕入れてるんだろうな?」

「まかせたまえ。」

この先に『ドンダケ』という町がある。そこでゆつくり話そうではないか。」

「勿体ぶりがたうて変態め……」

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

デジューン達はドクターNについて行き、ドンダケに到着する。  
そこは今までデジューン達が見てきた村とは比べ物にならないほど栄えていた。

「すっげえな！！なんか一杯店があるぞ！！」

「オマエ、そんなキヨ口キヨ口すんなよ・・・」

一緒にいるオレらまで田舎者と思われるじゃねえか。

「あ？喧嘩売ってんのかロンゲ？」

「田舎者丸出しなんだよオマエは。」



「いつもはあなのか？あの二人は。」

ドクターNは喧嘩するデジュンとスラップを見て言う。

「まあ、こんなもんじゃよ。」

「苦勞するね、キミは。」

「そうじゃな。最後の仲間くらい常識のある人がいいのう。」

「H A H A H A ! !」

次の仲間もクセ者なら更にキミの苦勞が増えるね。」

「まったくじゃな・・・」

ドクターNは一つのレストランの前で立ち止まった。

「ここがいいかな。」

じゃあこの中で話そう。」

「お主等、そこまでにして店の中に入るぞよ。」

リアナの言葉に耳を傾けず、デジュンとスラップは殴り合っている。

「やれやれ、困ったもんだね。」

「お主等・・・」

「ん？」



「待たせたな。」

「いや・・・」

黒い服に金の甲冑と目立つ格好なのか  
目立たないかハッキリしない・・・

それにオレに向けられたこの容赦ない殺気・・・  
この男、只者ではないな・・・

「静かなる豪風と呼ばれるソール」ゲイン・・・  
先日のキミの戦い、見せてもらったよ。」

「・・・」

「しかし『刻印』の力を使えばもう少しスマートに戦えたと思うが。  
それとも何か使えない理由でもあるのか、な？」

「!!」

「おおっと・・・」

一瞬でソールは男の後ろへ移動し、巨大な剣を男の首下へ向ける。

「貴様何者だ・・・返答次第では・・・」

「甘い・・・」

男の声が前からではなく、後ろから発声された。

男はソール以上のスピードで後ろへ移動したのだ。  
そして右手をソールの背中中に当てる。

一瞬で移動!?

このオレが追いきれなかったのか・・・  
それにこれは・・・

ソールは男の右手から発せられる凄まじいプレッシャーを  
背中越しではあるが、危険に感じた。

「オレはオージ・・・

キミと戦うために来た訳ではないよ。」

「オレに一体何の用だ・・・

刻印の存在を知っているのであれば只者ではあるまい・・・」

ソールは動じず、オージと名乗る男に質問を投げかける。  
そしてその巨大な剣で屠るチャンスを伺う。

「ハンター協会から話は聞いているのだから？

オレが今回のキミの仕事の依頼者だ。」

「ある者達を始末することか？」

「ああ。オレにも事情があつて今は派手な動きは出来ないのだよ。」

そう言うとオージはソールの背中から右手を離れさせ、  
腰のポケットから一枚の写真を取り出した。

「こいつらの始末を頼みたいんだが・・・」

オージの殺気が消えたのを確認し、  
ソールはオージから手渡された写真を見る。

その写真には丸い珍獣一匹、男と女が一人ずつ写っていた。

「左からデジュン、スラップ、リアナの三人だ。」

「・・・冗談じゃない。」

オレが出るまでもないだろう・・・」

ソールは手紙をオージに突き返し、  
早々に立ち去ろうとする。

「報酬は弾むが？」

「いらん・・・」

他のハンターにでも頼め・・・」

「キミだけの特別報酬・・・」

『神の世界へと続く扉』の情報・・・はどうだ？」

その単語を聞いた瞬間、ソールは立ち止まる。  
そして背中を見せたままオージへ問い返す。

「何か知っているのか・・・？」

「キミよりは知っているさ・・・」

この依頼が成功した場合、オレが持っている情報を全て教えよう。」

「・・・いいだろう・・・  
その依頼引き受けてやる・・・」

「ああ、今こいつらはドンダケに向かつてるはずだ。  
見た目に惑わされるなよ、かなりの強敵だからな。」

「任務・・・了解・・・」

それだけを言い残し、ソールは立ち去っていった・・・

「ククク・・・さて・・・」

オージは上を見やり呼びかける。

「オレに何の用だシャナ。」

オージの呼び掛けに応じ、シャナは上から現れた。

「今のはもしや『適格者』では・・・」

「ああ、その通りだ。」

「そうですね・・・ではやはりデジュン達のところへ？」

「それがどうした？貴様は一体オレに何の文句がある？  
貴様は所詮ジジイ共やエイスの慰み者、  
その分際でオレに立て付く気か？」

「そんな・・・ことは・・・」

「貴様を奴等の実験から助けたのは  
オレだということを忘れるな。」

「はい・・・」

「で、何の用だ？  
何かエイスに動きが見られたのか？」

「はい・・・」

リヴァレとヴァファムが倒されました。  
そしてエイスが今後の作戦のためにとオージ様を御呼びです。」

「クツクツク・・・」

むしろ精霊の力をデジュン達が入れた方が手っ取り早いんだ  
ろ？

奴はそれを知っているにも関わらず、この期に及んでまで自分の  
手を汚さないやり方を選ぶとはな・・・  
もう答えは出ているだろうに・・・」

「・・・・・・」

「よかるう、オレもすぐ戻ると奴に伝える。」

「は・・・」

それを聞いたシャナはオージの前から姿を消した。

「つくづく綺麗好きな坊ちゃんな事だ・・・  
昔の仲間の面影が残る奴等を自分の手で始末するのが嫌とはな・・・」

・  
」

オージは上を見上げ、

「もうすぐ『鍵』を持った神子も現れる。

運命の齒車は徐々に動き出す、か・・・

クッククク・・・」



## 第十四話 疾風が如く

ガイアがいると言われる部屋にエイスはただ立ち尽くしていた。  
エイスは気が付いていた。

勇者の生まれ変わりの一人が既に『風の精霊の加護』を得ている事を……

「何もかもが繰り返しか……」

そこへ一人の赤いバトルスーツを纏った男が現れる。

「イーフェイルか……」

オマエには城外の警備を任せたはずだが？」

「エイス様、失礼を承知で意見させて頂きます。

エイス様は本気で今の状態を何とかしようという考えがあるので  
しょうか？」

「何を……？」

「私はデスミオスや上の連中より、今はデジュン達を  
一刻も早く抹殺するべきだと思います!!」

「……………」

「我々四天王が『影』ではなく、『本体』で出向けば手っ取り早い  
はず!!」

何故それをなさらず、回りくどい事をなさるのですか!!」

「オマエ達四天王は精霊同様、ガイア様より生み出された存在だ。それは四天王本体は精霊を入れるための『器』にもなり、上の連中との戦での重要な戦力でもある・・・」  
万が一の事も有り得る。ここでオマエ達を失う訳にはいかんだ・  
・  
・

「しかし・・・!!  
昨今ではデスミオスの動きが活発になりつつあります!!  
このままではここの警備も・・・」

「安心しろ、デスミオスはまだ本格的には活動しない・・・  
刻が訪れるまで待つのだ・・・」

「それは・・・ガイア様の意思なのですか・・・?」

「無論だ・・・」

しばしの沈黙の後、

「分かりました・・・  
それでしたらもはや何も言いません・・・」

そう言い残しイーフェイルは部屋を出る。

「・・・ガイア・・・様の意思、か・・・」

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

ドンダケのあるレストランにて・・・

「どうだい、この名物ドン茸は？」

ここドンダケはその名の通りドン茸の名産地だね。  
更にこのレストランはドン茸料理で特に評判なんだよ。」

「お、なかなかイケるぞこれは！！」

変態もなかなか良い店知ってるな！！」

「ふむ、儂の村にもこんな美味なキノコはなかったのう……」

「いやいや、ドン葺てシャレかよ……」

それより真面目な話に來たんじゃねえのか？」

料理にがつくデジュンとリアナと別にスラップはかなり冷静だった。

「食えるときは食つとけよスラップ」

「黙れ珍獣。第一オマエの体のどこにそんな食べ物が入ってたんだよ!？」

「リアナもだ！！年頃の娘がはしたないだろ！！」

「お主、カッパとしすぎだのう・・・」

「H A H A H A ! !」

「じゃあそろそろ話そうか、これからの事を。」

そうドクターNが切り出すと二人は真剣な表情になった。  
デジンは相変わらず料理にがつついてたが・・・

「まず残りの精霊、『火』と『風』なんだが・・・  
両方場所は発見出来たのだが、不思議なことに  
風の精霊の反応が突然ロストした・・・」

突然の発言に二人、デジンは食べるのを止め、  
驚きを隠せなかった。

「そ、それはどういうことじゃ! ?  
まさかガイアの手下が・・・?」

「いや、基本的に精霊の祭壇へは選ばれた者しか入る事が出来ない。  
それはガイアの手物でもそうだ。精霊を殺す事など不可能。  
だからこそ基本的に奴等はキミ達が精霊の加護を得ないよう、  
先に祭壇を発見し、キミ達が来るのを待ち伏せするくらいしか出  
来ない。」

「じゃあなんでなんだよ! ?  
精霊が一つでも欠けたら戦力ダウンじゃねえか! !」

「落ち着けデジン。  
ドクター、オレ達のように勇者の生まれ変わりが  
その精霊の加護を得たという可能性は?」

「その可能性が高い、いやそれしか有り得ない。  
精霊は加護を与えたら、しばらくは力が弱る傾向があるからな。」

「儂等以外の者が精霊の加護を得たという事が・・・  
ではその風の精霊の加護を得た者を探し出さねばならぬのう。」

「まだ確実にそうだとは言いつけないが、  
しばらく私も風の精霊に関しては調べてみる。  
キミ達は明日にでも火の精霊の探索に向かって欲しい。  
火の精霊の場所はここだ。」

そう言いドクターNは地図を差し出した。

「ここって・・・？」

「さすがスラップ君だね。  
旅をしているだけ地理は詳しいみたいだ。」

「オマエでリアナの村に関しても詳しくったよな。」

「まあ修行のために色々な所回ってたしな・・・  
ちなみにここは有名な火山、『ブリリード山』だ」

「火山で・・・（。：エーッ！」

「火山とは・・・  
さすが火の精霊といったところかのう。」

「ドクター、さすがにこれは厳しいぞ・・・」

何か策はあるのか？」

「キミ達、リアナ君の魔法があるではないか。私の目算ではリアナ君の耐熱魔法の持続時間は2時間程だと思うのだが、

どうだねリアナ君？」

「まったくその通りじゃな。

じゃがこの魔法はかなりの魔力を消費してしまう。今の儂の魔力でも一日四回しか使う事が出来ぬ。」

「魔法の使用回数が限られてるてことは、恐らく火の精霊の適格者であろっデジユンと魔法を扱うリアナの二人が好ましいんだが・・・」

「ガイアの手の者がいると思われる以上、ここは三人で行くべきじゃろうな。」

「私もその方が安全だと思う。  
さて・・・私はそろそろ行くとするよ。」

そう言いドクターNは席を立った。  
そして懐からお金を出し、デジユン達に渡す。

「ここは私の奢りだ。これを使いたまえ。」

「おゝ変態気前がいいな。」

「H A H A H A ! !

キミ達には頑張ってもらっているからね。



『その刻印の力は回りの者までも傷つけてしまふ代物なんだぞ！？  
オマエはそれを判ってて使ったのかよ！！』

これはオレが生きているという証であり、  
オレの謎を解く手掛かりでもある・・・  
それを否定されるのであれば・・・

『貴様のようなガキには過ぎた代物だよ・・・』

こんな物がオレの体に無ければ・・・

『この世界のどこかに存在する 神の世界へと続く扉を探しなさい・  
・  
そこに全ての答えはあるのだから・・・』

もつと普通に生きていられたのかな・・・

『キミに僕の力をあげるよ。  
そして三人の仲間を探し、キミのやるべき事を見つけるんだ。』

仲間だと？オレに仲間等いらん。  
それはあの二人も同様、仲間などではない。  
オレはいつだって一人だ。  
それはこれからも変わらない・・・

『それがキミに定められた運命なのだから・・・』



運命・・・オレが生まれたのも運命だと・・・？  
馬鹿馬鹿しい・・・オレがここにいるのは運命ではない・・・

「これはオレの意思だ！！」

ソールの視線の先にはオージから見せてもらった写真の奴等がいた。  
そしてソールは背中に背負った剣を握り締め・・・

「まったくよお、今夜の宿どうすんだよお！！  
残りの金じゃロクなとこ泊まれねえぜ？」

「お主、まったく金を持ってなかったくせに  
よくそんな事が言えるのう・・・」

「まったく・・・  
ちよつとそこらへんでバイトでもしてきたらどうだ？」

「大体あの大会で邪魔が入らなければ  
スラップ倒して優勝して今頃大儲けだったんだよ・・・  
あゝなんか借金があったような気がするが時効だよな？よね？」

「オマエじゃオレには勝てんぜ？  
て借金で一体何！？」

ガキイイイイン！！

「・・・・・・・・」

「いきなりなご挨拶だな・・・！！」

突然の謎の男の攻撃をスラップは何とか受け止めた。

「おうおうおう!!」

「一体何が起きたんだよ!!」

「お主ガイアの手の者か!？」

「オレはある者に依頼され貴様等を始末しに来た・・・  
それだけの事だ・・・」

「始末て穏やかじゃねえな・・・  
第一その依頼者てのがガイアの手の者じゃねえのかよ!!」

「貴様等には関係の無い事だ・・・  
さあどいつから殺されたい?  
三人まとめて来るか？」

「なめやがってえええ!!  
おいスラップ、こいつはオレにまかせろ!!」

「まかせろってオマエ、無理だろ!!」

「大丈夫だ!!こんなナメた野郎オレがやってやる!!」

「こやつはこうなったら聞かぬしな・・・  
スラップ、ここは任せてはどうだろうかのう。」

「はあ・・・わかったよ。こいつはかなりの腕前だ。  
やばくなったらすぐ変われ、いいな？」

「ああ！！さあ行くぜ・・・  
て、まず名前を聞こうか？」

「ハンターのソール」ゲイン・・・  
戦闘レベル、ターゲット確認・・・  
オマエを・・・殺す・・・！！」

それは一瞬だった。

ソールは瞬時にデジユンの懐へ移動し、その大きな剣で薙ぎ払う。

そして薙ぎ払うと同時に、  
ソールが移動した際に生じたと思われる豪風がデジユンの頬を撫でる。

「くううう！！」

デジユンは何とかソールの太刀は避ける事に成功するが、  
ソールは巨大な剣を軽々と持ち直し、デジユン目掛け再び薙ぎ払う。

「あの野郎、ガイアの手の者の割には  
意外と汚い手は使わないな・・・」

「どういう事じゃ？」

「いや、最初の不意打ちは確かに卑怯と言えば卑怯だが、  
真正面からまずオレを狙ってきた・・・」

「よく意味がわからぬぞよ・・・」

「普通最初に狙うなら、始末しやすそうな女のリアナか弱そうなデ

デジュンだよな。

だが奴はそうはせず、オレから狙ってきた・・・」

「つまり弱者からではなく、敢えて強者から狙ったと？」

「ああ、それにこの感じはまさか・・・」

「やはりお主も感じたか・・・」

デジュンはまだ感じる事が出来ぬであろうが、  
精霊の加護を得た儂等には判る・・・」

「どうした・・・」

その程度の腕でオレに勝てるつもりか・・・？」

ソールの凄まじい速さの攻撃にデジュンは避けるのが精一杯であった。

「ちい！！」

あんなバカでかい剣を持ってこんな早く動けるのかよ！？」

ソールは大きく剣を振り落とし、デジュンはギリギリの所で避ける。  
あまりの威力に剣は地面深く突き刺さったが、いとも簡単に剣は振り上げられ薙ぎ払われる。

だがその一瞬の隙をデジュンは見逃さなかった。

「チャンス！！」

これでもくらいなあ！！」

デジュンはソール目掛け猛烈なタックルをかます。

が、それもお見通しであり、ソールは瞬時にデジュンの背後へと回る。

「チェック・・・メイト・・・」

ソールの巨大な剣がデジュンの右頬に触れる。

その冷たい感触、ソールの殺気にデジュンは額に冷汗を流してしま  
う・・・

「はあ・・・」

だから言わんこっちゃない、あのバカ・・・」

「どうするのじゃ？」

もちろん助けるのじゃろ？」

「それはそうだが

何とか奴を説得するしかないのか・・・」

そんなときだった、一人の少女がデジュンとソールの間に割って入  
り・・・

「丸いお兄ちゃんをいじめないで!!」

「オマエは!？」

バカ!! 危ないから早くどけ!!」

その子はユビナメ村でデジュンが助けた少女であった。  
目に涙を溜め、だが決して流さずソールの目を睨み付ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソールは剣を背中に戻し、

「ま、待ちやがれ!!」

まだ勝負はついてねえぞ!!」

「・・・命拾いしたな・・・」

だが今度会ったときは容赦しない・・・」

そう言い残し、ソールは一瞬でその場から退散してしまふ。

そこには静かに風が吹き、

まるで嵐の豪風が去って行ったかのようにであった・・・

## 第十五話 少女ラキの恋？モテモテなデジュン

「来たか・・・」

ガイアがいると思われる大広間にオージとシャナ、ソールが現れた。

「エイス、久しぶりだな。」

シャナから事情は聞いたが何か大変な事になっているみたいだな？」

（白々しい男め・・・）

私が何も知らないとしても思っているのか・・・？）

そうエイスは口に出しかけたが、

今そんな事をしては今までの監視が無駄になる。

それはオージも同様、お互いがお互いを監視するという関係上余計な言動は無用だ。

刻が訪れるまでエイスもオージも事を起こさないだろう。

「ああ、デジュン一行は既に四天王の二人を倒した。

もう一人はデジュン以外の奴等に倒されたみたいだが・・・

そしてデジュン達は明日の朝、火の精霊がいると思われるブリリド山に向かう。

ブリリド山の次はいよいよこのガイア城に攻めてくるだろう。」

「ほう、あの下らん大会からかなり成長したようだな。

それで、オレはどうすればいいんだ？

呼んだからにはオレに何か用があるのだろう？」

「明朝イーフェイルをブリード山に向かわせ、デジュン達の目的を阻止する。」

オマエにはその間、この城の護りを任せたい。」

エイスの後ろからイーフェイルが姿を現す。

（なるほど、影とはいえ四天王の最後を向かわせ、オレを自分の目の見えるところに置くか・・・

これはかなり焦っていると見るか、それとも・・・

だがオレとしてもソールの覚醒という任務を終わらせた以上、後はこいつの監視でも構わんのだが、上がそれで納得するかどうか・・・）

オージはシャナを見、シャナは頷きで返す

（年寄り供はお見通しということか・・・

だが、ここからはオレのオリジナルでやらせてもらうぜ？）

「ああ、了解だ。

だが話を聞いたところ、デジュン達はかなり腕を上げている。そいつ一人では心許ないだろ？」

その言葉を聞いてか一瞬イーフェイルの眉間にシワが寄った。だがそんな事を気にせずオージは続ける。

「そのためにオレは今まで役に立ちそうな奴を連れてきてやったのよ。」

紹介する。こいつの名はソール、かなり腕が立つぜ？」



エイスはソールの目を見つめる。

何か不思議な違和感を感じて、無意識の内に言葉を発してしまう。

「その・・・目は・・・？」

「オレの目がどうかしたか・・・？」

「いや、何でもない・・・」

いいだろう、イーフェイル、オマエはソールと共にブリリード山に向かうのだ。」

「了解しました。」

ではソール殿、明日の準備のためこちらの部屋に来て頂けますかな？」

「了解だ・・・」

ソールはイーフェイルと共に別の部屋に行き、この大広間は残された三人だけになった。

（あの感覚は”超越者”・・・？

だが奴の目に刻印は刻まれていなかった。

オージめ、一体何を企んでいる・・・）

「さて、オレは疲れているんだが、

とりあえず休ませてもらっていいか？」

「ああ、構わん。」

「それじゃしばらく休ませてもらうよ。」

それと・・・シヤナが寂しがっているぞ？  
ゆつくり出来るときはシヤナの相手をしてやれよ。」

何がそんな可笑しいのか、ニヤニヤしながら  
そう言い残しオージもまた大広間を後にした。

「エイス様・・・」

「シヤナ、奴は一体何を考えている？  
奴が連れてきた男、ソールとやらは何者だ？」

「いえ、私は何も・・・  
腕の立つ者としか・・・」

「・・・そうか。  
まあいい、オマエも疲れているのだろう？  
デスミオス供が攻めて来たときにはオマエにも手伝ってもらっ  
そのためにも今は体を休める。」

「わかりました・・・それでは・・・  
あ、エイス様・・・」

「・・・なんだ？」

「いえ、何でもありません・・・」

「・・・・・・」

シヤナが部屋を出るのを確かめてか、  
エイスの目の前に一人の部下が現れる。

「どうした・・・？」

「先程のソールという男、

奴は先日ヴァファム様の件の三人組の一人です。」

「なるほど・・・そういうことか。

後でイーフェイルに伝えろ、

ブリリード山にてデジュンと共にソールも抹殺せよ！！

そしてこの任務内容はオージ、シャナには漏れぬよう重々気を付ける！！」

「はっ！！

・・・ですが今始末しなくてよろしいのでしょうか？」

「オージがいる以上この城内で始末するのは得策ではない。

今はオージだけでなく上の連中までもが動かれると面倒だろうしな・・・

だがブリリード山であればいくらかでも始末するのは容易だろう。

「

「そういう事ですか、納得しました。

まだ奴等には利用価値がありますからね・・・」

「そういう事だ・・・

ふっ、オージ・・・いや上の連中の目的が少しずつ見えてきたな・・・

そう何でも自分達の思い通りにうまくいくと思うなよ・・・！！」

エイスはガイアがいると思われるカーテンの前に立ち、

「ベレーニガン」  
・  
・  
・

こいつさえ完成すれば後は上の連中といえど脆いものだ。

それまでの間何としても精霊と勇者達を揃わせる訳にはません・・

•  
L

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「まったく何だったんだよ、あいつぁ!!」

「今度は絶対何倍にもして返してやんぜ！」

「それよりお主、まずは命の恩人に感謝せねばいかぬだろうに。」

リアナが目配せし、デジンはあるときユビナメ村で助けた女の子の視線に気付いた。

「あ、ああ。」

今回はオレが助けられちゃったなあ、ありがとよ。

「丸いお兄ちゃん、どこも怪我はないの・・・？」

これはもしかや少女とのフラグが立った？

とスラップとリアナは感じたそうなの．．

「ああ大丈夫だぜ！！」

それよりキミがなんで？」

「村があんなことになってからね、

ここの街に住む事になったの．．．」

「そうか．．．」

ここの街は結構大きいし、住むにはいい所かもしれないな。」

「お兄ちゃん達はまたどこか行っちゃうの．．．？」

少女はうるうるした瞳でデジンをみつめる。

（おいおい、あの子本気でデジンを．．．？）

（まあ趣味は人それぞれだからのう。

若さゆえの過ちということ．．．）

「ああ、お兄ちゃん達は悪い人達を倒すため、  
明日にはこの街を出るんだ。」

「そうなんだ．．．」

少女がそう落ち込んだとき、デジン達の前にその子の両親が現れた。

「おや、あなた達はいつぞやの．．．」

「あ、どうものじゃ。」

娘さんから聞きました、この街に住むそうで・・・」

「ええ、これだけ大きい街ですから住む家はすぐ見つかりました。

前の村の生活とは違いが大きいのでなかなか馴染めませんが・・・

」

そう言いながらも少女の父と母は笑いながら話を続けた。

「それより、急ぎでないでしたら私達の家でお茶でもどうですか？  
命を救って頂いたお礼もしたいと思っていましたので。」

突然の少女の父親の発言に驚いたが、デジュン達は顔を見合わせ、  
ここはお言葉に甘えよう（うまく行けば今夜の宿代が浮くかも）と  
考えた。

「お邪魔でなければ・・・」

ですが我々は今日の宿を探さなければいけないので、  
そんなにゆつくりは出来ませんが・・・」

（うまいぞよスラップ！！

さりげなく宿の当てが無いことを言うとは！！）

「それでしたら是非家に泊まって下さい。

娘のラキも喜びます。な、ラキ？」

「うん！！」

（キタ

。。。）

！！ さすがスラップ

だぜ！！）

（これで今日の宿は安心じゃのう）

「さあ、それではこちらへ。」

デジュン一行はそうラキの父親に誘われ、家に泊まる事になった。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「邪魔します!!」

ラキ親子宅へ最初に足を踏み入れたのはデジュンだった。

「それじゃあなた、私は晩御飯の仕度をしますわ。」

「ああ、今日はデジュンさん達がいるんだ。」

「ごちそうを頼むぞ。」

（ふうむ、ごちそうも出して頂けるとは・・・  
これはなかなかお得じゃのう・・・）

（オレのおかげだぜ、感謝しろよ？）

（儂等て意地汚いのう・・・）

「ねえねえお兄ちゃん。」

「この絵本読んで欲しいの。」

「おお、いいぜ！！」

「なんたつてオレは絵本読みの天才と、ととと」

絵本を持ったラキはデジュンの手を引っ張り、  
こっちこっちと自分の部屋に招き入れる。

「ははは、あなた達が来たおかげでラキもあんなにはしゃいでます。  
今日は本当にありがとうございます。」

「いえいえ、お礼を言うのはこっちですよ。  
こちらこそありがとうございました。」

「晩御飯までまだ時間が掛かりますので、  
それまであなた達の事についてお話を聞かせて下さいませんか？」

「儂等の事について・・・ですか？」

「自己紹介が遅れましたね。」

「私の名はダイス、それでも一応武器を作ったりして生計を立てて  
ます。」

「はあ」

「ちなみに妻のウエンは薬師をやってましてね、



「これがまたよく効くんですよ。」

「あの、話がよく見えないのじゃが・・・」

「いえね、あなた達のために武器、防具をプレゼントしたいと思ってるんですよ。」

明日の朝ここを発つという事なので今から新しいのを作る事は出来ませんが、

在庫の中からでしたら、あなた達に合う物をすぐ用意出来ますので・・・

そのためにあなた達の戦闘スタイル、サイズを教えて頂きたい。」

「さすがにそこまでして頂く訳には・・・」

泊めてもらい、ごちそうしてもらう身でありながらもさすがにそこまでは悪いと思うスラップとリアナであった。

「いえいえ、是非用意させて下さい！！」

命を助けて頂いたんです、これでも安いくらいですよ！！」

ここまで言われたからには断る訳にはいかないだろう、とスラップは考え、

「わかりました、お言葉に甘えさせて頂きます・・・」

スラップ達は自分達のスタイル、サイズを教え、

武器と防具は明日の出発までに用意してもらおう事になった。

そしてダイスとの話が終わった頃、

母のウェンが現れ、晩御飯の準備が出来た事を知らせる。

「いやぁこんな大人数での食事だと楽しいですなぁ」

「そうね、どうせなら明日出発と言わず  
もう少しゆっくりしていけばいいのに・・・」

「ははは、でもオレ達では世界の平和を守るために戦ってるんだぜ  
）。  
平和になったらまた寄らせてもらうよ！！おばさんのメシもつま  
いしな！！」

「お兄ちゃん達、また来てくれるの？  
いつ？いつ？」

「え〜っと・・・  
まぁ近いうちだよ、近いうち！！」

「絶対だよ？絶対ちゃんとラキのどこに来てね？」

「ああ、約束だ！！  
ちゃんと迎えに来るから待っててな！！」

（何、この空気・・・？）

（迎えにつて、デジンはちゃんとあの子の気持ちを  
分かってての台詞なのかのう・・・）

「まったくラキはズいぶん丸いお兄ちゃんが好きなんだなぁ。」

「あつははははは!!」

いやゝモテモテはつらいなあ、ねえスラップ君!!」

「なんだよ、その勝ち誇った顔はよ・・・」

せつかくのメシが不味くなる、こつち向くんじゃねえ」

「なんだオマエ悔しいのか、ああん?」

「おい珍獣、オレに喧嘩売ってんのか?

いいぜ、今なら高額買取中だコラアアア!!」

「お主等人様の家でやめぬか!!」

まったくいつもいつも・・・」

「ははは、賑やかでいいじゃありませんか。」

「そうね、あらラキ?」

母親はラキの口の周りにべっとりついたソースを拭き取る。

「ママ、ありがとお!!」

「まったく、まだまだ子供ねえ」

「ははははははは」

その日はみんなが楽しく笑い、楽しい食事だった。  
オレにもこんな日が続くと思ったんだよな・・・

毎日山に狩りに行って、家に帰ったら

親父とお袋とメシを食って、その日の狩りの事を話したり・・・

そんな何の変哲もない、いたって普通の日常。

それがガイア、エイス、オージ等の仕業で突然失われてしまった・・・

・

必ず、必ず仇は取るよ、村のみんな、親父、お袋・・・

## 第十六話 再会、そして決闘

それは誰の記憶なのか・・・

それは決して有り得ない記憶・・・

だが深いまどろみの中で確かに垣間見た・・・

もう一人のオレの姿を・・・

「いづくぜあああ!!」

「ワシは負けん!! 負けはせぬぞおお!!」

「これで終わりだ!! ガイアアアアアアア!!」

二体の丸い生物は互いに激しくぶつかり合った。

そして激しい爆発音と共に映像はプツツと途絶え、また別の映像が流れる・・・

「このファルスティアを守るため・・・ガイア、貴様を倒す!!」

精霊よ、私に力を!! この世界を守る力を!!」

それは先程見た記憶と同じような光景・・・

だが今見ている記憶は、お互い先程の記憶とは違う人物であった。

ガイアと呼ばれたそれは、壁に埋もれた巨大な女性だろうか、顔で

あつた。

そしてそれに立ち向かうは、肩まである美しい銀髪の男であつた。

『我はこの星の守護神・・・』

我が滅せればこの世界は滅ぼされるであろう・・・

精霊に選ばれし者よ、それでも主は我を討つと申すか・・・？』

「黙れ！！そんな虚言を信じられると思うか！！」

貴様を倒し、クリーチャーを止め、私はこの世界の平和を取り戻す！！」

ハイワ・・・ソレハニンゲンヲショウキヨスルコト

ヒトガヒトデアルカギリ、カナシミノレンサハエイエンニツヅク・・・

・

ソレハトオイミライデモオナジデアリ、ソレハファルスティアノハ  
メツライミスル・・・

ダカラワタシハ・・・

それはその記憶に混じって何者かの声が聞こえた。  
とても気味の悪い、聞くだけで寒気を感じる声だ。

これは一体何なんだ・・・？

初めの映像でオレが戦っている相手は・・・ガイア？

なら二つめのこの映像は誰だ？

こんな記憶、知らない・・・



「よし起きたな。」

おばさんが朝飯作ってくれたんだぜ？  
冷めないうちに早く来いよ！！」

「おお、わかった・・・」

目覚めたばかりにも関わらずデジユンは意識がハッキリしていた。  
原因は分かっている。あの夢だ。

夢？いや、夢じゃない。

あれは確かにオレが持っている記憶、  
だが有り得ない記憶、身に覚えのない記憶・・・

「何か、オレにあるってのか・・・？」

考えてもまったく答えが出ないことは初めから分かっている。  
だがどうしても何かが引つかかる・・・  
何か・・・大事な事を忘れてる？

「お兄ちゃん、ご飯食べないの・・・？」

「あ、ああ、ごめんな。」

すぐ行くから待っててくれ。」

今は考えても仕方ないか・・・  
この戦いの先に答えが見つかるかもしれない、  
今はそう考え行動しよう・・・



|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「ソール殿、これを使いなされ。」

ブリリード山へ向かう途中、ソールは怪しげな首飾りを受け取った。

「・・・何だ、これは？」

「ブリリド山はマグマによってとても熱気です。常人ではとても耐えられるものではありません。そのための首飾りです。」

周りにいるイーフェイルの手下を見ると皆同じ首飾りをしている。

「  
・  
・  
・  
気が向けばな。」  
」

「わかりました、それでは先を急ぎますぞ。」

「ああ……」

（デジユンとか言ったな。

その二人の仲間もそうだ、奴等とオレの中の精霊の力の共鳴……あのとき精霊に言われた言葉、仲間を探せと……



「そのグローブには軽くて硬い特殊な金属が埋め込まれてまして、今までの素手での格闘よりかなり有利になると思いますよ。」

「確かにとても金属が入ってるとは思えない程軽いな・・・  
おっちゃん、ほんとにサンキュー!!」

そう言いスラップは拳の素振りを始める。

「う・・・む・・・」

「どうしたリアナ？」

サイズが・・・でかいのか？」

「全体としてはピッタリなのじゃが・・・  
その・・・胸が・・・のう・・・」

どうやらダイスが用意した法衣の胸のサイズが合っていないらしく、  
胸の辺りがぶかぶかのようなようである。

「す、すみません!!」

サイズ間違えてましたか!？」

「・・・いや、儂が見栄張って  
胸のサイズをサバ読みしてました・・・  
じゃが、ぶかぶかも悪くはない、儂はこれで良いぞよ。」

「それでしたら良いのですが・・・  
ちなみにその腕輪にも秘密がありましたな。」

リアナは自分の右手に付けてある腕輪を見た。

「その腕輪の窪みにリアナさんが所持している魔石をセットすると、普通の１．５倍程の力を発揮するんですよ。」

ダイスは自慢げに腕輪の説明を続ける。

「更にこれがメインなんですが、これを使用すれば詠唱魔法と同時に、魔石の魔法を使えます。更に更に！！

その方法を用いれば二つの魔法を混ぜ合わせる事も出来、その力は未知数です！！

今までそれを行って来たのは大魔法使いのカレン様だけと言われています。」

「母上が・・・

儂の魔法と、母上の魔石・・・」

リアナは魔石が入った袋を抱きしめ、

「今一度、母上の力を貸して頂きます・・・  
ダイス殿、ほんとに感謝致します・・・」

二人がダイスの武器防具でパワーアップしている中、一匹置いてけぼりな生物がいた。

「おい、盛り上がっているのは良いけどよ。  
オレのは・・・？」

「オマエのはないぞ。何を今更（笑）」

「いやいや、普通主人公のオレもパワーアップしなきゃおかしくね？  
大体オレだけ未だに精霊でパワーアップもしてないんだし」

「まあお主がそう言うのももったもなのじゃが、  
お主に合う武器や防具となるとのう・・・」

「自分の体系見て言えよ。  
オマエに合うモノなんてないだろ。」

リアナはあくまで静かに告げようとしたが、  
スラップは横からハッキリと言ってしまった。

「　　（　　、　　）　　」

「いやいや、お主今更驚かれても・・・」

「時間があればデジュンさんのは新しく作れたのですが・・・  
いえ、時間と”原魔石”さえあれば・・・」

ダイスは申し訳なさそうにそう呟く。

「原魔石・・・」

確か魔石は、ゲミル族が原魔石に魔法を封じ込めた物。  
つまり魔石の元じゃな。」

「ええ。元々原魔石はとてつもない魔力を秘めており、  
その力を用いて誰でも魔法を使えるよう作られたのが魔石です。  
もっとも、原魔石の魔力の扱いが難しかったため、結局使用者の  
魔力が必要になり、

魔法詠唱を短縮出来るだけという代物になりましたがね。」

「その原魔石とデジユンの武器が関係あるのか？」

「原魔石は本来、武器や防具に使われる石なんです。

原魔石を使用したアイテムの事を”魔道具”といい、

その力はとても凄まじく、あなた達の役に必ず立つのですが・・・

この時代、原魔石がなかなか発掘されなくてね・・・」

「無いものをグチグチ言っても仕方ないさ。

いいぜ、オレはこのままでよ。」

「せめてデジюнさんにはこれを・・・」

そう言いウエンは傷薬、そして炸裂弾を3つデジюнに渡した。

「その炸裂弾はかなり強力なので、使用時には50m程離れて使用して下さいね？」

「50m離れるて・・・

本当はかなり強力なのじゃな・・・」

「本当に色々サンキューな！！大切に使用してもらっぜ！！」

デジюнはウエンとダイスに礼を言い、

その二人の後ろにいるラキに近づく。

「ラキ、またな。

落ち着いたら必ず来るからさ、そんな悲しい顔すんなよ。」

今でも泣きそうなラキの頭に手を乗せ、優しく撫でてやる。

「絶対約束だよ？」

ホントにホントに絶対だよ・・・？」

「ああ、オレを信じろ！！」

このデジユンをな！！」

ラキは流れそうな涙を堪え、満面の笑みで・・・

「うん！！」

「それでは僕等はもう行きます。

本当に色々お世話になったのじゃ。」

「このグローブ大切にするぜ！！」

オレ等の勝利を祈ってってくれよ！！」

「おっちゃんも、おばちゃんも、ラキも・・・

またな～～～！！」

そして三人は旅立った・・・

「本当に不思議な方達だ・・・」

「そうね・・・

本当にクリーチャーに怯える毎日から解放してくれそう・・・」

「お兄ちゃん、気を付けて・・・」





「では・・・」

リアナは少し長めの詠唱を始める。  
そして詠唱が終わると同時に、水のようなものが三人の体を包み、  
消えた。

「これでOKじゃ。」

「よっしゃ！！」

「これで準備万端だぜ！！」

「持続時間は2時間・・・」

いつガイアの手下が現れるかわからない、  
デジュン、リアナ、急ぐぞ。」

耐熱魔法の時間は2時間、そしてもしその2時間過ぎたとしても、  
耐熱魔法はあと一人分しか使えない以上、三人は急ぐしかなかった。

「どうだデジュン？」

精霊との共鳴はあるか？」

「うん・・・」

なんか体がピリピリはするんだが、  
まだ近くにはいないみたいだ・・・」

「お主の共鳴だけが頼りなのじゃ、頼むぞよ。」

「ああ、なんとか頑張ってみ・・・！！」

そのときデジュン、スラップ、リアナの三人は何かを感じ取った。

「これ・・・が精霊の共鳴・・・？」

「いや違う、精霊が近くににいるからオマエも感じるんだろ。  
これはもう一人の勇者との共鳴だ。」

「勇者！？」

まさかこの近くにいるのか！？」

「もう一人の勇者・・・」

確かソールと言ったか、奴がいるぞよ！！」

「は！？

ソールが勇者だって？」

その時だった、見覚えのある巨大な剣を持った男が上空から降って来たのだ。

そしてソールに続いて見慣れない男達が何人も降って来る。

「また・・・会ったな。」

今回はあの娘もいない、今度こそ・・・殺す！！」

ソールはその巨大な剣をデジュン達に突きつけ、  
自分は既に攻撃の意思ありという事を示す。

「ソール殿、助太刀致します！！」

「イーフェイル、手を出すな・・・」

こいつ等はオレがやる・・・」

そうソールに言われたイーフェイルと呼ばれた男は  
他の兵士達にも手を出さぬよう指示した。

「あくまで私達の目的はデジユン達の抹殺、  
少しでも不利になるようならば手を出させて頂きますぞ。」

「ああ・・・」

「スラップ、リアナ。  
さっきの話がたとえ本当だろうとも!!」

デジユンは構え、

「オレはあのかの仕返しをしなきゃ気が済まねえ!!」

「いや、ちょっと待てよデジユン!!」

「気が済むまでやらせようスラップ。  
どのみちソールもこちらの話には応じる気は無いようだし・・・」

「ち・・・」

二人が疲れ果てた頃に説得するしか無いってかよ・・・」

「いくぞああああ、ソール!!ゲイン!!」

「来い、デジユン・・・!!」

デジユンの拳、ソールの大剣が激しくぶつかり合った・・・



## 第十七話 刻印という名の呪縛

「いつくぞああああ、ソール!!ゲイン!!」

「来い、デジユン・・・!!」

デジユン目掛け振り下ろされる大剣、  
デジユンはその剣の腹に一撃を放つ。

ソールは大剣ごと後ろへと体を持って行かれる形となり、  
デジユンは更に大剣を握る腕を思い切り蹴り上げた。  
そして大剣はソールの手から離れ、

「ちいつ!!」

「やらせるかよ!!」

デジユンは更に剣を空高く蹴り上げた。  
そしてその反動を利用しソールの懐へとデジユンの拳が炸裂する。

「じゃあっ!!どうだ!?!」

ソールは岩壁へと吹き飛ばされた・・・

はずであったがそこにはソールの姿はなく、

「落ちろ・・・!!」

「な、デメエ!!」

デジユンは頭を掴まれ、そのまま地上へと叩き落される。

「あちゃゝ・・・途中までは良かったんだがな。」

「このままではまずいぞよ・・・」

「ん？何がだ？」

「このままでは耐熱魔法の効果が切れる。」

今はソールなぞに構わず精霊を探すべきなのかもしれぬ・・・」

「今回の精霊はデジユン、奴しか精霊の居場所はわからない。  
ならば奴を精霊探索に行かせ、オレ達がこの場を何とかするしかないんだが」

「あの調子では無理じゃのう・・・  
儂等が手助け出来る状況ではないし・・・」

上空より落下してきた大剣をソールはキャッチし、  
再び大剣の先をデジユンに向ける。

「く、くそお・・・  
なんて素早い動きなんだ・・・」

「立て・・・  
貴様の力はこんなものではないだろう・・・」

「つたりめえだああ!!」

二人は再び激しい攻防を繰り広げながら上空へと上って行く。

「イーフェイル様、今がチャンスかと・・・」

「分かっている、分かっているのだ・・・」

イーフェイルは何かスイッチのような物を握り、スイッチを押すのを躊躇っている。

「エイス様の命令とはいえ・・・」

「このような汚い真似など・・・!!」

「ですが確実に仕留めるためには・・・」

「・・・ええい!!」

「このような汚い方法で殺される事、  
恨むなら私を恨めよ・・・!!」

イーフェイルは意を決し、力強くスイッチを押す。

スイッチが押された直後、上空で凄まじい爆発が起こった。

「な・・・!!?」

「デジユンとソールが!!」

「突然爆発・・・じゃと?」

上空で戦っていたデジユンとソールの突然の爆発、

あまりに突然すぎたためスラップとリアナは状況を飲み込めず  
いた。

「マジかよ、おい・・・」

デジユン！！返事しろ！！聞こえてるんだろ！！」

スラップの声空しく、スラップの下へ返って来るのは爆発した物の  
残骸のみ・・・

そこにデジユンとソールの姿は無かった。

いや、この黒い焦げた残骸こそが二人なのか・・・

「こんな、こんなのってないよ・・・」

こんな・・・デジユンが・・・」

リアナはその場で泣き崩れた。

スラップも涙を流した、が静かにイーフェイルの方へと向き、

「デメエか・・・！！」

きつたねえ真似しやがって・・・

よくも、よくもデジユンを！！」

「こちらとしても不本意・・・いや、やめておこう。

我が名はイーフェイル、四天王が最後の一人である！！ まとめ  
て掛かって来るがいい！！」

ここで貴様等の息の根、止めてくれる！！」

「うるせえ喋るんじゃないねえ！！デメエは絶対殺す！！」

スラップはその拳をイーフェイルへと放つために、  
デジユンの仇を取るために、立ち向かう。



「それでいい・・・」

「プラズマアブレイイイク!!」

イーフェイルから放たれた雷はスラップの体突き抜ける。

「があ・・・!!」

「スラップ!!」

く・・・これ以上儂の仲間を死なせはせぬ!!」

リアナは属性風を司る魔石を右手の腕輪にはめ、

「奴を切り裂け!!レベル10発動!!」

「ぬるいわ!!」

スラップがされたように、

雷は魔法とリアナ自身を突き抜いた。

「あああああっ!!」

「どうした、こんなものか!!」

「これが勇者の力なのか!!」

「ちつくしゅう・・・」

「儂等では無理なのか・・・」

二人は満足に立ち上がる事も出来ず、涙を流した。

勝てないのが悔しくてじゃない。デジユンが殺され、何も出来ない無力な自分に悔しくて・・・

「違うな・・・」

スラップは何とか立ち上がり態勢を整え、続けた。

「奴は死んじやいねえ・・・」

オレは信じる！！あいつを！！」

「そうじゃな・・・」

今もそこらへんで倒れておるはずじゃ・・・」

「ああ・・・」

だからっ！！こいつをさっさと倒して・・・」

「デジユンを探す！！行くぞよスラップ！！」

リアナの回復魔法で二人の体は完璧とは言えないが回復した。

「その意気や良し！！」

何度でも私の雷で貫いてみせるわ！！」

（このような奴等に私は汚い手を・・・

せめてもの情けだ、苦しまぬよう殺してやる・・・！！）

「破岩拳、くらえええええ！！」

「母上、儂に力を貸して下さい・・・」

風と地、レベル20、ダブル魔法発動！！行けえええ！！」

「これで決めるぞ！！」

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「ソール、オマエももうすぐ10歳になるんだろ？」

「てことはたった一つの」刻印、  
オレが頂いちゃうことになるな」

「オマエそんな事言っつ？」

オレの村には男子が10歳になったとき、  
刻印が刻まれた金色の眼球を右目に移植するという儀式がある。

眼球を移植する前の子供達の間では、この世界を護る英雄になれると言われている。

その眼球を移植し、拒絶反応を起こさなければ  
晴れてその村”限定”の英雄となれる訳だ。

だが拒絶反応を起こせば刻印付の眼球は早急に抜き取られ、  
元の眼球は神への贄とされる。

そして儀式に失敗した子供は片眼で生きて行くことになるのだ。  
今までこの眼球に選ばれた者は誰一人としていない。  
それは即ち、この村の男は全員片眼ということになる。

そもそも、この刻印付眼球がどこから手に入れたのか、  
移植する事自体が間違っているのではないか、  
オレは憧れより、疑問と不信感の方が大きかった。

そしてオレの儀式の前にジユックの儀式が訪れた。  
結果は言うまでもなく、駄目であった。

ジユックが失敗したとなれば次にはオレ、  
オレが失敗すればまた次の子供へと、  
”英雄”が見つかるまで永遠に繰り返される。

「馬鹿らしい・・・」

他の子供は英雄に憧れ、そしてその夢は当たり前に打ち砕かれる。  
オレは英雄になりたいとは思わない、刻印に選ばれる訳もない、  
やっても無駄ならオレの片眼を無駄にしてまで儀式などやりたくもない。

そう思っていた・・・

オレの10歳の誕生日、その”夢”は無残にも打ち碎かれる・・・

「お、おおおお・・・」

ついにこの時が来たのじゃ・・・！！」

「ソール大丈夫？痛くは・・・無いの・・・？」

「ソール、オマエは神に選ばれたんだ・・・」

オマエの父である事が今日程誇りに思った事はない・・・」

オレは、どうやらこいつらの言う”神”とやらに選ばれたみたいだ・・・

下らない・・・だがオレが選ばれたおかげで、この儀式は今日で終わるのだ。

まったく嬉しくない・・・下らない、下らない、下らない！！

オレは横で泣いている父と母を、刻印が刻まれたこの新しい右目で睨んだ・・・

「あゝあ、結局オレはダメで、オマエが選ばれちゃったかあ・・・」

ジユックは包帯で隠された右目を撫でながらそう言う。

あの日から金色の瞳は、オレの本来の瞳の色になり、本来持ってた瞳と変わらない様で、とても儀式を行ったとは思えなかった。

だがこいつの右目はカラツポなんだ・・・

儀式で得たもの、ジユツクは”黒い”目。  
オレはこの新しい目・・・

「まったく嬉しくないさ・・・

こいつに選ばれてからが大変なんだよ。

村の連中には変な特訓はさせられるしな・・・」

「良いじゃねえか。なんたつてオマエは英雄だぜ？  
神に選ばれた人間なんだぜ？」

「・・・・・・・・」

このオレの右目にはめられた眼球に拒絶され、  
片目を失ったこいつ、いや今までの男達に比べればオレはマシなの  
かもしれない・・・

だがこれのおかげでオレの村は崩壊する事になる・・・

「た、大変だ村長！！

武装した集団がこの村に！！」

「何！？

・・・まさか目当ては”刻印”か！？」

「このタイミング・・・

それしかありえねえ！！

奴等、”扉”がどうか言ってやがった・・・」

「いかぬ!!」

長年待つて現れた子・・・

奴等に渡してはならぬ!!」

オレが刻印に選ばれてから数日後、

100人近い集団が村に攻め込んできた。

大人の男達は謎の集団と戦い、

オレ達子供や、女、老人は村長の家の地下へと隠れた。

「なんで、なんでこんな事になったんだよ・・・」

「オレの親父から聞いた話なんだけどよ、

奴等、どうやら刻印に選ばれた者を狙っているらしいぜ・・・」

「じゃ、じゃあまさか奴等はソールを・・・?」

刻印に選ばれなかった子供達、儀式すら出来ずにいた子供達、

それらは皆オレを、この右目を見た。

そいつらの目は、オレとこの右目がこの戦いの原因だと静かに語っている。

オレか?オレがいけないのか?

オレだって好きでこんな物を得た訳じゃない!!

「みんな止めろよ!!」

今はそんな事言ってる場合じゃねえだろ!!」

「ジユック・・・」

「安心しろソール・・・」

オマエを悪く言う奴はオレが許さねえ!!」

「すまない・・・」

そのときだった、天井が剣や色々な刃物に貫かれ、その隙間から光が降り注ぐ。

「ま、まさか見つかったんじゃない・・・」

「どうするんだよ!!」

こ、こ、こんな所、逃げ場も何もないぞ!？」

そして天井は見事に破壊され、一斉に集団はオレ達の所へ駆け寄る。

「おい貴様等、この中に刻印に選ばれたガキがいることは知っている。」

さっさと渡せ。」

単刀直入であった。

そして集団の何人かが剣をこちらに向ける。

「ガキ供をカタっぱしから調べてもいいんだが、こちら時間も惜しいのでな・・・」

リーダー格の男が合図し、その部下が右端の子供の頭を剣で貫く。

女、子供、老人は一斉に悲鳴を上げる。

そして更に、殺された子供の左の老人も頭を貫かれた。



「騒ぐな！！」

右から順に殺してゆく・・・騒いでも殺す。

見つかるまで殺してゆくからな、

殺されたくなければさっさと教える。」

それ以降、誰も喋らなくなった。

最初に殺された子供は右目が無い。

奴らは刻印所持者を殺してしまわないように、まず右目が無い男、女、老人を殺すつもりだろう。

こちらが刻印所持者を教えなければ、右目が存在する男のみ残せばいいのだ。

所持者がどうかは後でゆつくり調べればいい。

どちらにしても所持者はバレる。違いは犠牲者が出るか出ないかだ。

いや、教えたところでこの雰囲気では・・・

だがそんなとき、

「ソール・・・」

あなたはここから逃げなさい。」

オレの隣にいた母親が囁く。

『私が時間を稼ぐからそのスキに』と・・・

一体どうやって？

まさか命を捨てる気か？

今まであんた等は刻印、刻印で親らしい事をしなかつたくせに、

こういうときだけ親気取りか？

いや違うな！！あんた等は下らない崇拜心でこの”眼球”を守りた

いだけなんだ！！

だがオレはこんな所で死にたくはない。

だからあんたがそう言うなら、オレはあんたを犠牲にさせてもらう！！

そして母親が立ち、母が言うスキとやらを作ろうとしたときだった。同じようにジユックも立ち上がり、

「なんだ貴様？

もしや貴様が刻印付か？」

「ち、違う・・・

でも刻印を持つてる奴なら・・・知ってる・・・」

ジユック！？

まさか・・・オレを・・・？

「ほう・・・

どいつか教えてもらおうか？」

「そ、それは・・・」

「それは？」

「あいつだ・・・あいつが刻印の！！」

[illegible]

「!!!!!!!!」

「……?」

!!

「く、つかぶあ……!!」

口、腹部から血を流しながらソールは辺りを見回す。  
下はマグマ、ソールは岩壁に突き刺さった大剣にぶら下がっている状態だ。

「そうか．．．奴のおかげで．．．  
奴は．．．？」

つま先の辺りに違和感を感じる。  
目が霞んでよく見えないが、丸い生物が見える・・・

デジュンか？

「うっ、うっ……」

どうやら奴のおかげで、お互い助かったみたいだな……

## 第十八話 無力

「立て・・・」

貴様の力はこんなものではないだろう・・・」

「つたりめえだああ!!」

二人は再び激しい攻防を繰り広げながら上空へと上って行く。

「デメエも勇者なんだろうが!!」

なんでガイアの味方なんてしてやがんだ!!」

「・・・オレにはオレの目的がある!!」

そのためならば利用してやるさ、何でもな!!」

「バツカ野郎がああああ!!」

デジュンの拳がソールの大剣に叩きつけられる。

「っ!!・・・なかなか良い一撃だ・・・」

だがオレにも譲れないものがある!!」

彼は・・・彼は心に深い傷を持っている・・・

デジュン、キミ達しか彼の傷を癒してあげることとは出来ない。  
どうか、彼を救ってあげて欲しい・・・

「これは!？」

この声、この感じ・・・風の精霊か!？」



「う、うう・・・!!」

「気が付いたか・・・」

「ここは・・・？」

オレは・・・あのとき・・・？」

デジyunはソールの足に引っ掛かっている状態で辺りを見回す。

「マグマの上・・・」

どうやら爆発で吹き飛ばされたようだ・・・くっ!!」

デジyunの顔に上から大量の血が降り注ぐ。

「オマエすごい血じゃないか!？」

「首に掛けていたならアウトだった・・・」

どうやらオレは、このための捨て駒だったようだ・・・」

自分の腹部から生暖かいモノを感じる。

よく見てみるとかなりの出血だ・・・

腹に穴でも開いたか・・・？」

「・・・いや、デジyunが引き剥がしていなかったらアウトだった・・・」

デジyunを見てみると、全身に火傷を負っている。

だがオレよりはかなりマシな状態だった。

「オレは貴様の敵だ。」

何故オレを助けた・・・」

「わからねえ・・・」

オレはオマエが嫌いだ。

ガンガンにぶっ飛ばしてやりたいくらいにな。」

「・・・・・・・・・・」

「だが、オレは聞こえた。

ぶつかり合うとき、オマエの中の風の精霊が

オレに言っただ。オマエを救って欲しいと・・・」

「・・・・・・・・・・」

「そしてオレは見た。

オマエの悲しい過去を・・・」

「オレの・・・過去・・・？」

「それを見て、オマエが何を求めているのか・・・

信じていた者に裏切られたこと・・・

自分が無力なため大切なものを失ったこと・・・

オレはオマエを理解した!!」

「何を言っている・・・

貴様にオレの何が!!」

「分かるさ!! オレや、スラップ、リアナ・・・

みんな同じなんだよ!! オマエだけじゃない!!

オレ達は自分が無力なせいで・・・あのとき無力だったからっ!!



目の前で大切な者の命が奪われていったんだっ!!  
みんな、みんなそうなんだよ!!」

「だから・・・だから何だと言うんだ!!」

「オレ達は何のために精霊に選ばれたんだ!?これ以上悲劇を繰り返させないためだろ!？」

あのかきは無力だったさ、オレもオマエも・・・でも!!今オレ達には力がある!!

勇者の生まれ変わりとして転生し、精霊という力を得た!!

オレ達は力を合わせ、この世界を何とかしなきゃいけない!!

あのかきの後悔をもうしないためにも・・・

今オレ達は争っている場合じゃないんだっ!!」

「く・・・」

「オレを信じろ!!オレ達はオマエを裏切らない!!」

「!!」

「だから・・・」

だからオレ達に力を貸してくれ!!

オマエの力が必要だからっ!!オレと共に戦ってくれ!!

ソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

-----

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「あいつだ・・・あいつが刻印の!!」

ジユツクはオレを指差し、そう吼えた。

「ほう・・・あいつか・・・」

「ジユツク・・・？」

「ソール、すまねえ・・・」

オレは・・・オレは・・・

まだ死にたくねえ・・・!!

オレは刻印にも拒絶され、今まで良い事なんて何も無かった・・・  
だから、まだ、まだ死にたくねえんだよお・・・」

「・・・」

怒りなど沸かなかった・・・

ただ、親より信頼していた親友に裏切られたのが悲しくて、  
オレは呆然とジユツクの言葉を聞き流すだけだった・・・

「そ、そうだ。」

オマエには言っていなかったが、

オレ、この前隣村のルーに告白したんだ!!

まだ返事は貰ってねえんだけどよ、良い感じだったん」

「小僧、ご苦労だったな。」

バンッ

静かな部屋にその無機質な音だけがやけに響いた。

「オレ達の任務・・・

ヘイム村の豚供を抹殺し、刻印のガキを捕獲すること・・・  
悪いな、元々貴様等豚供を生かす気は無いんだよ。」

それを聞いた途端、みんなの顔が青ざめる。

「オマエ達、刻印のガキ以外は全員殺せ。」

「了解。へへ、隊長、女はどうしやすか？」

どうせ殺すんなら・・・」

「好きにしろ。但し最後は殺せ。

オレはガキを上まで連れて行く、集合時間には遅れるなよ?。」

「イエッサー!!」

てことだテメエ等!! 日頃溜まってる分吐き出すぜえ!!」

兵士達は一斉に、女達の衣服を破り捨て、

己の欲望を満たすためだけに行動する。

女は悲鳴を上げ助けを求めた。

だが子供、老人は何も出来ず、目をそらす事しか出来ない。

オレは状況を把握出来ず、倒れているジュークを見る。

額から血が流れている・・・  
これは一体何だ？一体何が？

「ジュツク・・・・・・・・・・？」

銃で頭を貫かれた・・・のか？  
さっきまでここにいたジュツクはもういない。  
ここにあるのはただの肉の塊だ。  
こんなにも・・・こんなにも人間の命は簡単に・・・！！

「さあ来い！！！」

隊長と呼ばれた男がオレの手を掴んだ。  
だがオレはそれを振りほどく。

そして女に夢中になっている兵が脱いだ服からナイフを取り出した。

「オマエ等・・・オマエ等！！　よくも、よくもっ！！！」

「まったく世話が焼けるガキだ・・・」

こいつ以外は自分達の行為に夢中で、オレ達のことには気が付いていない。

せめて、せめてジュツクを殺したこいつだけはっ！！

「うわあああああ！！！」

オレはナイフを奴の腹に刺すべく向かった。  
だがそいつにとっては、例えばオレがナイフを持っていようが関係無かった。

ナイフは蹴落とされ、腹に拳が叩き込まれる。

「おぶあぶっ！！あくあ・・・」

「大人しくしてろ、そうすれば痛い思いはしない。  
今だけだな・・・」

「くうう、う、うわあううう・・・」

オレは・・・無力だ・・・

親友を殺され、女はこんな奴等の慰みモノに・・・

オレは英雄じゃないのか・・・？

何にも出来ないじゃないか。

むしろ、こいつらを呼び込んだのはオレじゃないのか？

オレがこんなのに選ばれなければ、こんなことにはならなかったの  
では？

オレは泣くことしか出来なかった・・・

「ガキ、行く・・・ぞあ！？」

隊長と呼ばれた男の腹から剣が突き抜けた。

それはオレの母親らしき人物が背中から刺した物だった。

「キサ、マ・・・！！」

「ソール！！早く逃げなさい！！」

あなたはこんな所で死んでは」

ザシュ

「はぐあはあ！！」

オレの母親は、その男の剣によつて腹を切り裂かれた。

「舐めた真似しやがつて！！

く、これは”再生”に時間が掛かるか・・・」

その男は生きていた。

あれだけの傷をもつとせず、平然と立っていたのだ。

それだけの騒ぎが起これば、遊んでいる兵達も異常な事態に気が付く。

兵達は何事かと女を投げ捨て、オレ達を取り囲む。

この時点で、オレの母親の捨て身の策は見事に失敗した・・・

「ソール・・・ごめ、ん・・・さい・・・

今ま、であなたに・・・母親、らしいことなんて何も・・・」

「もう、喋るなよ・・・

分かった、分かったから・・・！！」

「刻・・・印に選ばれたの、は偶然・・・なんかじゃ、ない・・・

あな、たの、運・・・命・・・」

「っ！！喋るなっつてんだろ！！」

「この世界、のど、ここに存在す・・・神の世界へと続く扉を、探・  
なさい・・・

そこに・・・全て、の、答えはあ・・・るのだから・・・」

「・・・っ」

「最後、くらい・・・」

「はは、親・・・らし、事・・・出来な、くって・・・ごめ・・・ね？」

「・・・か、・・・あさんっ!!」

オレは何年ぶりだろう、刻印刻印とやたらうるさくなってから親と認めていなかった人を、母さんと呼んだ。

「・・・っ!・・・あ、り・がと・・・」

それが最後の言葉だった・・・

「つつ!!」

母さんの体はすっかり冷たくなり、もはやピクリとも動かない・・・

「かあさん!! かあさん!!」

う、うわあああああああ!!」

それはそのとき突然輝き出した。

オレの右目が、この刻印が!!

「ま、まさかあのガキ、このタイミングでだと!？」

「うつうつわあああああああああ!!」

オレはその場にいた敵を全て消した。

跡形もなく、息の根を止めてやった・・・  
どうやってやったかなんて覚えていない。  
ただ分かるのは”刻印”の力だという事・・・

オレは敵を消した後、生きている人間を置いて地上に出た。  
そこは、あるものは死体、瓦礫のみ・・・

その中には、体に何本もの槍が突き刺さった父親がいた。

オレは目の前で大切な者を失った。

オレは何で、何で無力でどうしようもない・・・

「オレは・・・一体何なんだ・・・!!」

オレは、オレはっ!!」

「まだ生き残りがいたぞ!!」

・・・っ!!あの目はまさか、隊長がやられたのか!？」

地上で父親達と戦っていた奴等だろう。  
奴等は続々とオレ周りに集まって来た。

死のう・・・死んでみんなの所へ行こう・・・  
そうすれば何もかもが楽になる・・・

『この世界のどこかに存在する 神の世界へと続く扉を探しなさい・  
・

そこに全ての答えはあるのだから・・・』

「っ!!」



右目を押さえ、

「探すさ・・・探してやるさっ！！  
そうすれば全て分かるんだろ！！  
この目が！！オレの運命が！！」

もちろんあの連中もだ！！

必ず、必ず後ろで糸を引いている奴がいる！！  
そいつらも全て見付けて殺してやるっ！！

オレは残りの敵から黒幕を吐かせるため、  
色々な手を使い奴等を痛めつけた。  
だがどんなに痛めつけても奴等は何も喋らない。  
結局、オレの拷問に耐え切れず敵は全員死んだんだ。

唯一ある手掛かりといえば、奴らが着ていた上着・・・  
その袖に描かれた銀色の狼のマーク・・・そのみだ。

オレは宛てもなく彷徨った。

ただ、母が言った扉、銀色の狼のマークを探して・・・

いつだったか、ある遺跡で出会ったんだったな。

エイジ・・・お節介な、本当の兄みたいな奴だった・・・

オレは奴に誘われてハンターになった。

そこだったら世界中の色々な情報が手に入る。

そこだったら”神の世界へと続く扉”、

オレの村を襲った銀色の狼の黒幕、

何かしらの情報があると思った。

何より、こいつならオレは本当に信頼出来る仲間だと思った。

でもエイジはオレの仲間じゃなかったんだ・・・

いや……違う。

あいつはオレの事を信じてくれていた・・・  
信じていなかったのはオレ・・・

あいつはオレの事を本当の仲間だと思ってくれた。  
オレが拒絶していたんだ、全てを・・・

[illegible]

「っ！！」

ソールの瞳から涙が流れた。

「オレは．．．もうあんな後悔はしたくない．．．オレは無力なままは嫌だ．．．っ!！」

「だったらオレと一緒に来い！！  
オレ達は無力じゃないんだっ！！」

「オレは、オレは・・・っ!!」

## 第十九話 仲間との絆！！目覚める炎の戦士

「オレと一緒に来いソール！！」

「オレは、オレはあっ！！」

ソールはデジンを空高く蹴り飛ばす。

「ちょ！？おま！！」

空高く蹴り飛ばされたデジンは何とか地上に着地し、まだマグマの真上でぶら下がっているソールを見る。

「オレは・・・もうダメだろう・・・」

オマエだけでも・・・行け！！」

「バカ野郎が・・・」

いつまでも一人でうじうじしがって！！　このまま終わってもいいのか！？

このまま無力のまま終わっていいのか！？」

デジンはソールへと手を伸ばし、

「仲間でえのはな、片方だけが手を差し伸ばしただけじゃ成り立たねえ！！」

「！！」

「お互いが手を差し伸ばし、ちゃんと掴み合ってこそ仲間だろう！

「！」

「デジュン・・・」

「オマエの怪我だってな、オレ”達”の仲間が何とかしてくれる！！  
だからこの手を掴めソール！！」

エイジ・・・

オレは今、本当の仲間というものがわかったような気がする・・・

オレはこいつ等の仲間になると決めた。

でも・・・いつか、いつか必ず、

オマエとも本当の仲間になつてみせる。

今度はちゃんと勇気を出して、オマエの手を掴むから・・・

「さあ早くしろ！！この手を掴むんだ！！」

「・・・・・・・・・・」

だが、デジュンの手が短すぎるため、  
ソールの手がデジュンまで届かなかった・・・

「何してるんだ！？

まだ悩んでるのかオマエは！？早くしろ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

届かないっての・・・



「ぐあっあああああっ!!」

「うあうっわああ!!」

イーフェイルから放たれた雷は二人を貫く。  
だが二人はそれでも・・・

「何故・・・何故なんだ!？」

「テメエを倒すまでは何度だって立ち上がって見せるさ・・・」

「二人が生きておるのに、儂等だけが死んではならぬだろう・・・」

「オレは・・・どうやらオマエ達を過小評価していたようだ・・・  
オマエ達のためにも!!オレも本気を出させてもらおう!!」

イーフェイルの両手に巨大な雷の玉がいくつも集まり、  
それは更に巨大な一つの矢となる。

「これは・・・マズイかもな・・・」

「さすがにアレを喰らえば儂等でも・・・」

「これで終わりにしよう・・・  
プラズマブレイク・アルティメット!!いけい!!」

「すまねえデジユン・・・!!」

ドガアアアアアン!!

突然爆発が起き、イーフェイルはその雷の玉もろとも吹き飛ばされる。

「お、オマエ生きて・・・」

「やはり生きておったか・・・」

二人の視線の先にはソールを抱えたデジュンがいた。

「今戻ったぜ！！二人とも無事か？」

「へ、へへ・・・」

「やっぱ死んでるかとも思ってたが・・・」

「こちらの気も知らねえでよ・・・」

「何はともあれ、ソールも何とか無事のようじゃな。」

「ああ、こいつに回復魔法、耐熱魔法を掛けてやってくれ。」

「こいつは熱対策も何もしてないみたいだからな。」

デジュンはリアナの前にソールを倒し、リアナはソールの容態を確認する。

「この傷はかなり酷いの・・・」

「それにこの熱、よく熱対策せずここまで耐えれたものじゃ。」

「リアナ、治せるか？」

「治せるが・・・耐熱魔法、ここまでの傷を回復させる魔法となると、」



僕の魔力は完全に尽きることになる・・・  
見たところ、お主も火傷が酷いようじゃが？」

「オレは耐熱魔法のおかげで爆発にも多少耐えれたんだろう。  
オレはいいからソールを何とかしてくれ。  
そいつはオレ達の仲間だからな！！」

「まったくオマエはスゴイ奴だよ・・・  
オマエを見てたらオレもまだ頑張るしかねえな！！」

「いや、後はオレ一人でやる。  
オマエもリアナとソールと一緒に休んでてくれ。」

「オマエ何言っただよ！？  
オマエ一人で・・・」

そこでスラップは倒れこんだ。  
デジュンが生きてた事によって、今までの緊張の糸が切れたのだ。

「オレが何とかするよ。だから心配するな！！」

「ち・・・すまんが頼んだぜ・・・」

そしてデジュンは爆煙の中の一点を見つめる。  
徐々に爆煙が晴れ、そこには・・・

「この私にここまでの傷を負わせるとは・・・  
なかなかの炸裂弾だな。雷玉を盾にしなければマズかった・・・」

「それはオレとソールへの不意打ちに対する仕返しだ。」

「・・・・・・・・。」

不本意とはいえ、すまなかったな。

そして生きていてくれた事に礼を言う。」

「何を今更・・・

毎度毎度デメエ等は汚い手ばかり使いやがって・・・  
人の命を何だと思っている！！」

「言いたい事は分かる。

だが、私にも今更引けないのだよ・・・」

イーフェイルは両拳に雷を纏い、構える。

「オマエも戦士なのだろう。

ならば！！戦いで貴様の正義を証明しろっ！！

この四天王最後が一人！！イーフェイル参るっ！！」

デジュンも構え、イーフェイルはデジュンへと仕掛ける。

だがデジュンはその小さい体を生かし、相手の攻撃を紙一重で避ける。

「なるほど、動きは悪くないな。

だがこれはどうだ！！」

「な！？」

避けたと思った右の拳が急に伸びた！？

「はあああああ！！」

せええいやああああ!!」

雷を纏った拳が何発もデジユンに叩き込まれる。  
避けたと思ったら直撃、それを何度も繰り返しながら・・・

「はがうはっ!!」

「あの野郎!!」

拳の雷が一瞬伸びて攻撃しやがったてのか!？」

「儂等と戦ったときのように対集団用広範囲攻撃、  
そして今の対個人用一点集中型攻撃・・・  
やはりあの者、只者ではない・・・」

(ちっ・・・)

ネタが分かっても避け切れるものでもないぞこれは!!」

デジユンは何とか致命傷を避けるべく防御のみ。  
だがそれでもイーフェイルの攻撃はじわじわとデジユンの体力を奪  
ってゆく。

「どうしたデジユン!!」

貴様はその程度ではないだろう!!」

「わかってらああ!!」

デジユンのパンチを繰り出すがイーフェイルには届かず、  
逆に痛恨の一撃をもらう形となってしまった。

「ぐあふっ!!」

「私の買いかぶりすぎか・・・」

所詮貴様はその程度、誰一人守れぬ弱者なのだ!!」

更にもう一撃叩き込まれデジyunは吹き飛ばされる。

「あうっ・・・!!」

「さあデジyun・・・」

もう終わりにしようか、これでっ!!」

イーフェイルは先程不発に終わった

プラズマブレイク・アルティメットの構えを取り、

「オレは・・・諦めないぞ!!」

オレを信じてくれた仲間のためにも!!こんな所でっ!!」

「だが貴様にはそれだけの力はないのだ!!」

力が無ければその想いは何の役にも立たん!!

貴様は無力なのだ!!」

「オレはこんな所で朽ちはしないっ!!」

「ならばこれに耐えてみせるデジyun!!」

私を失望させるなあああああっ!!」

プラズマブレイク・アルティメットが放たれた。

その巨大な雷の矢はデジyun目掛け真っ直ぐ飛んで行く・・・

（偉そうに吠えたが・・・オレはこの程度か・・・

かつこわりい・・・どうしようも出来ねえよ、すまねえみんな・・・

そのときだった、ソールは目を覚まし叫んだのだ。

「デジュンっ！！貴様はオレに供に戦うと、仲間だと約束しただろ  
う！！」

オレ達は無力じゃないと！！オマエが言ったんだっ！！  
ならばっ！！オレに貴様の力を見せろっ！！  
こんな所で終わるのかオレ達はあああああっ！！」

「ソール・・・」

「手助けしてやんだ！！こんな所で終わんじゃねえぞ！！  
オレ達のっ！！オレ達三人の力！！受け取れえええ！！！！！！」

「スラップっ・・・！！」

「儂等の力、お主に託す！！  
今こそお主の闘志の炎を燃やすのじゃ！！」

「リアナ・・・みんな、ありがとう・・・  
オレは負けない！！諦めない！！」

ソール、スラップ、リアナの精霊の力が一斉にデジュンに集まる。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

既に諦めかけた闘志が再び燃え上がるとき・・・  
”それ”はデジュンの気持ちに応えよう。

それは赤く、彼等の闘志を餌として燃え上がり、それはデジユンの強大な力となって今、具現化される！！

ゴオオオオオオオオオ！！

「私のプラズマブレイク・アルティメットがつ……  
かき消されただつ！？」

イーフェイルが放った雷の矢は一瞬でかき消されてしまった！！  
その闘志の炎につ！！

「オレは……諦めない！！  
この闘志の炎でオマエを燃やし尽くし！！  
その先のガイアを必ず倒すつ！！  
このファルスティアを守るために！！」

デジユンは両拳に炎を纏わせ、その両拳をイーフェイル向け力強く  
組む！！  
そしてその炎は巨大な火柱となり、イーフェイル向かって放たれる  
！！

「これはまさか……！！精霊の、力！？」

巨大な火柱の渦で敵を包み、身動きを取れなくし、  
そこへ強力な一撃を撃つ！！

「はあああああつ！！」

くられイーフェイル！！これが仲間との絆！！  
オレ達の力だああああああああああああ！！」

デジユンは右手一点に炎を集め、イーフェイルに撃ち込むため飛ぶ  
！！

「私の体よ！！動けええええええええ！！  
貴様のその力っ！！打ち砕いてみせる！！  
プラズマブレイク・アルティメット！！いけえい！！」

「だあああああらっしやあああああ！！！！！！」

デジユンの炎の拳、イーフェイルの雷の矢が激しくぶつかり合う！！  
だが雷の矢はデジユンの拳に打ち砕かれ、そのままその拳はイーフ  
ェイルに撃ち込まれた！！

「がふあああっ！！か、かはっ・・・！！」

イーフェイルは血を大量に吐き出し倒れこむ。

「見事だ・・・

オマエ達の・・・絆、見せてもらった・・・  
私の最後の相手がオマエ達で、良かった・・・」

「イーフェイル・・・オマエ・・・」

イーフェイルが倒れた今、残された兵達は・・・

「イ、イーフェイル様が・・・」

「こうなったらオ、オレ達だけでも戦うんだ!!  
今の奴等ならオレ達だって・・・」

兵達は一斉にデジユン達を取り囲む。  
だが・・・

「引け!! オマエ達は城へ戻り、この事をエイス様に伝える!!」

それはあまりにも意外な台詞であった。  
確かに今、この状態でこの人数で襲われたらデジユン達でさえ危ういにも拘らずだ。

「し、しかし・・・」

「これ以上私に恥をかかせるな!!  
オマエ達は引くのだった!!」

「は、はい!!」

兵達は一斉に敬礼し、撤退していった。

「オマエ・・・」

「ふ・・・私も甘い・・・  
どうした? 何を見ている・・・

敗者等気にせず前に進め!! そしてこの世界を救ってみせろ!!  
あの世とやらで貴様等の正義、見せてもらっぞ・・・」

イーフェイルは立ち上がり、崖まで向かう。



「イーフェイル!!」

「さらばだ・・・デジューン!!」

イーフェイルは崖から身を投げ出す・・・  
下のマグマに向かって・・・

「イーフェイルウウウウウウっ!!」

それは余りにあつけない、この戦いの幕引きであつた・・・

「オマエは・・・確かに最後まで戦士だったよ・・・  
オマエの事は、絶対忘れない・・・」

## 第二十話 真実はどこに

「なるほどね・・・」

道理で見付からない訳だ・・・」

ドクターNは深い森の中で気配を絶ち、様子を伺う。

その視線の先には巨大な城がそびえ立っている。

そして、その城にぞろぞろと怪しい集団が入城して行く様をドクターNは見つめる。

「ここら一帯も既に調査はしたはずだが、あのときはあんな物無かった・・・」

だが今はここに存在する以上、考えられることは絞られる。

何らかの装置で普段は姿を隠す、というのが筋かな？

この事を早くデジュン達に伝えなければ・・・」

ガイアの兵と思われる連中が全員入城したのを見届けると、ドクターNは退散しようとする、がその時だった。

「が!？」

この場から立ち去ろうと踵を返した瞬間、ドクターNは顔を何者かに掴まれたのだ。

「・・・・・・・・」

掴まれた指の隙間から見える顔に見覚えがあった。

それはエンファイ会場で現れた二人の内の一人、エイスであった。

「エイス・・・いや、オマエはやはり・・・  
私の予想が今、確信に変わったよ!!」

バアアアン

ドクターNの顔の布は跡形もなく、一瞬で燃え尽くされた。

「く・・・」

「その緑の髪、瞳・・・  
オレも今確信に変わったよ。  
やはり貴様だったか、ネス・・・」

「懐かしいな、こうやって顔を合わせるのは。  
オマエは少しやつれたんじゃないか？」

「あれから1000年も経つ・・・人が変わるには十分すぎる時間だ。」

「オマエは変わらないな・・・姿、声、年・・・何も変わっていない・・・」

「1000年か・・・人が腐るには十分すぎる時間だ。  
オマエはその長い時間、体が腐るより先に頭が腐ったかよ。  
オレが変わっていないなら、オレがどういう人間が分かるだろ？  
まさか忘れちゃいねえだろうなっ!!」

ネスと呼ばれた男は、いつものように煙球を地面に叩き付ける、  
はずだったが・・・

エイスはネスの煙球を持つ右腕を掴んだ。  
掴まれた右腕は一瞬で真っ黒な灰にされる。

「ぐっ、あああ!!」

「分かっているさ・・・長い付き合いだ。  
相変わらず、下らん玩具遊びが好きなんだろう？」

「くっ・・・!!」

「貴様の右腕はオレの炎で灰にした・・・  
今この場で殺されたくなければ妙な真似はするな。」

「っ、なあんてな。くっくっ・・・」

全てお見通し、さすが供に戦った仲間てか？」

腕を跡形もなく燃やされたはずのネスからは、  
痛み、恐怖といったものがまったく見られなかった。  
そればかりか、血や、肉を燃やしたときの嫌な臭いがまったくない。

「相変わらず、よく分からん男だ・・・  
まさか、自分の身体までも玩具にしたと？」

「御名答、だがそこまで分かっているながら油断したな!!  
オマエもそのスカした性格は変わってねえよ!!」

ネスの腹部が左右に開き、光輝く。

「っ!!」



「オマエ達大丈夫かあ？」

戦いを終えたデジyunはスラップ、リアナ、ソールに駆け寄る。

「来るの遅えんだよ・・・」

「ごめん・・・」

「まったくじゃ。」

・・・じゃが、お主も精霊の力を得たのじゃな？」

「ああ、あのとき突然力が溢れて来たんだ。

オマエ達みたいにまだ精霊には会っていないけど・・・」

「おそらくこの近くにいるのじゃな・・・

儂等はこちらで休んでおる。デジyun、火の精霊に会ってくるのじゃ。」

「おう！！」

そうだ、回復魔法使えないんだろ？みんなこれ使えよ。

ラキの母ちゃんから貰った薬だ。」

デジyunはリアナ達に傷薬を渡した。

「よし、じゃ行ってくるよ！！」

「デジyun・・・」

そこでソールが呼び止めた。

「ん？」

「ありがとう・・・」

そして・・・よ、よろ、よろしく・・・」

「無理するなよ・・・」

ま、改めてよろしくな！！」

「オレはスラップだ。

ドンダケのときの不意打ちは貸し一つな？  
て訳でよろしく。」

「僕はリアナじゃ。

たった一人の可愛い女子じゃからとて、襲うでないぞ？  
うむ、よろしくなのじゃ。」

「・・・よろしく・・・」

「あはは、なんだよオマエ等のそれはあ」

（これがお互いが手を差し伸べ、掴み合うという事、仲間という事・  
・  
デジュン、オレはオマエから大事なものを教わったよ・・・  
本当に、ありがとう・・・）

「よし、あまり耐熱魔法の時間も残ってないしな。  
急いで行くよ、それじゃ！！」





中は一切の光が無く、どこまでいっても暗闇であつた。  
だが、不思議と迷うことなくそこに辿り着いた。

「よお兄弟、オイラの力、気に入ってもらえたか？」

どこからともなく聞こえる声。

「あんたが火の精霊・・・か。」

淡く輝く少年はデジュンの問いに答える。

「正解、これでオマエ達は四人の精霊の加護を得た訳だ。  
まずはおめでとう。」

「あのとき、あんたの力が無ければオレ達はやられていた。  
ええっと、ありがとう・・・ございます。」

「そんな無理してかしこまらなくていいぜ？  
元々助ける気なんか無かったんだしな。」

「な・・・」

「あそこでやられるなら、それも運命・・・  
それまでだった。だが・・・」

火の精霊の指先に小さな映像が表示される。

「分かるか？これがオマエの前世、勇者の一人マルスだ。」

「そいつが！？オレの・・・」

それはデジユンが夢で見た銀髪の剣士だった。

「あいつもな、仲間のためになら自分を犠牲にしても戦い、そしてどんな絶望的な状態でも決して闘志の炎を消さず戦い抜く奴だった・・・」

「・・・・・・・」

「あいつをオマエに重ねて見てしまったんだよ。そんなわけだ。オイラが力を与えたのは。」

「なんつうか・・・」

「精霊のくせにいいかげんだってか？」

まあ四人の精霊の中じゃオイラが最年少だしな（笑）

「ははは・・・」

「で、オマエさん達はこれからどうする？」

やはり先代の勇者達と同じく、星神ガイアと戦うつもりか？」

「当たり前だ！！教えてくれ！！ガイアが何故星神なのか、封印されたはずのガイアが何故復活したのか、この世界の真実とは何か！！」

「んゝいくつかオイラ達精霊からは答えられないのがある。それでもよければ、ヒント程度なら答えることは出来るが。」

「それでもいい！！教えてくれ！！」

「まずガイアが星神、これは事実。」

ガイアはこの星の創世記から存在している、この星の防衛システムなんだ。」

「防衛、システム・・・？何のための？」

「それは”怨霊”、”クリーチャー”・・・

色々呼び方はあるみたいだけど、正式名称は”デスミオス”。そのデスミオスからファルスティアを守るためだ。」

「クリーチャー・・・デスミオス・・・

っ！！て、ことはガイアとそのデスミオスは・・・ガイアがデスミオスを操っている訳ではないて事か！？」

「ありや、てつきり知ってるものかと思っただけ。

オマエ達はそういう認識だったんだな。」

「デスミオスて一体何なんだ！？

奴等の目的、何故オレ達人間を狙う！！」

「オマエが人間かは別として・・・

デスミオスはこの世界に生きとし生ける物全ての天敵とも言える存在。

奴等の目的等は一切不明だ。無限に現れ、破壊の限りを尽くす。そしてそれらからこの星を守る、それが星神ガイアだ。」

「でもデスミオスはかなり前から存在しているし、それは一体？ガイアの防衛システムなんか機能していないじゃないか！！」

デジユンに構わず、火の精霊は続けた。

「永い間、この星を防衛していたガイアの力は徐々に弱り始め、それに比例して活発化するデスミオス、そしてどういう訳か突然のガイアの暴走。

暴走したガイアは、自らの体から異形の者を作り出し、人間達に牙を剥くようになった。」

「それはまさか・・・」

「その暴走したガイアを止めるために四人の者が立ち上がった。それがオマエ達四人の前世、”マルス””サラ””リユーネ””アデュー”だ。

そして四人はガイアを封印し、ガイアから生み出された異形の者達も活動を停止した。

ガイアが封印されたおかげで、更にデスミオスは活発化する結果となったけどな。」

「何が何だか分からない・・・そんなことが・・・」

「だが1000年程前に何者かがガイアを復活させた。

一体何のために復活させたのか・・・

いや、むしろガイアの暴走こそがこの戦いの発端だ。一番の疑問はその暴走だろうな。」

「まさかエイスとオージが・・・？」

「・・・さあね・・・」

オレが答えられるのはギリギリここまで。

あとは自分の目で確かめてくれ。」

「・・・わかった。

色々ありがとな。おかげで色々分かったよ。」

「いや、オイラもギリギリの状態・・・

オマエ達に加護を与えるっていうのはな、結構身体に負担が掛かるんだよ。

しばらくは人間の前に姿を現すことは出来なくなる・・・  
その間にオマエに話せて良かったよ。」

「・・・何故そこまでして、自分の身を削ってまで・・・  
オレ達に力を貸してくれるんだ？」

「オイラ達精霊はガイアから生み出された身。  
だからといってガイアとは完全に独立した存在だから、ガイアの  
状態には影響されないけどね。」

「ガイアから生み出された存在だって!？」

「でも、例えかつては人間の敵だったとしても・・・  
オイラ達の生みの親であるガイアが何者かに利用されるとい  
うのなら、

それを止めたいと思うのが普通だろ？」

「・・・」

「さあ、もう時間だ・・・

どうか、オイラ達の親を解放してやってくれ・・・  
この悲しい運命から・・・」

そう言い残し、火の精霊は消えてしまった。

「ガイアとデスミオスは繋がっちゃいなかった・・・  
オレはガイアが仇だと思い込んでいた・・・」

ガンッ!!

拳を思い切り壁に叩き込む。

「くそおおおおっ!!」

オレは今までみんなの仇じゃない奴と戦っていたってのか!!」

デジyunは更に何発も壁に叩き込む。

「オレ達は何も知らなかったんだっ!!  
くそおおおおおおおおおおおおおお!!」

## 第二十一話 それぞれの想い

「お、デジュンが戻って来たぜ。」

スラップの指差す先にはデジュンがいた。

「何か様子がおかしいのう・・・」

「確かにあの野郎、ガラにもなく暗いな。」

「・・・・・・・・」

三人はデジュンに駆け寄った。

「お主、精霊から何かを聞き出したのじゃな？」

「ああ・・・」

いつもと違うデジュンに三人は戸惑ったが、今は話している時間はない。

耐熱魔法の時間も残り僅かであるため、早くここから抜け出さなければいけないからだ。

「まずはブリリード山から出る、それからしよつぜ話はよ。」

「スラップの言う通りじゃ。デジュンもそれでよいな？」

「ああ、すまない・・・」





次はこのガイア城に攻めてくるでしょう。」

自室にてシャナは腕輪から発せられる四人の声を会話していた。

『とんだ曲者揃いだな。』

『やはり一番の謎はオリジネーターの存在だろう。何故あやつがこの世界に存在しているのか。』

『理由は察しがつく。ただ確証が無いだけだ。』

『本当の意味での覚醒をしない限り、現段階ではオリジネーターは脅威ではない。』

今は我々の計画を進めるのが先だ。まずは奴等を利用し、あの力を手に入れる。』

「了解しました。では当初の予定通りに・・・」

『そのためのオマエとオージだ。全ては神の世界へのために・・・』

そこで腕輪からの通信は途絶える。

その通信が終わったのと同時に、オージはシャナの部屋へ入って来た。

「年寄りどもの話は終わったか？」

「オージ様・・・」

「まったく、この城に閉じ込められてから暇だな。」



- - - - -

「そうか・・・そんなことがのう・・・」

四人はブリリード山を降り、体を休めるために街を探している所であつた。

そして四人は街を探しつつ、これからのことを話し合つた。

「オレ達が戦う相手・・・それはガイアではなく、  
エイス、オージ、そしてクリーチャーであるデスミオスで事か。」

「ああ・・・オレの仇はガイアなんかじゃなかった・・・」

「そんなにウジウジすんなよ・・・  
確かにオマエの仇はガイアではなく、デスミオスだつた。  
でもな、精霊の話だとガイアが暴走したのにも訳がありそうだぜ？  
ガイアを暴走させたのはエイスやオージの可能性が高い。」

「ふむ・・・その後、勇者に封印されたガイアを復活させたのじゃ  
ろうか。」

「確証はないがその可能性は高いな。  
奴等はオレ達四人と精霊の力が揃うのを阻止しようとした所を見ると、

そこにもまだ秘密がありそうだな。」

「奴等がオレにオマエ等の抹殺を依頼したのは、  
勇者の生まれ変わりを共倒れにさせるためだつたのだな。」

「・・・・・・・・」

「そんなクヨクヨすんなよデジュン!!  
仇じゃないからといって、このまま奴等を放っておけないだろ。」

「オレ達は無力じゃない・・・オマエが言った言葉だ。  
無力じゃないのならこの力、この世界のために役立てるべきだろう・  
・・・」

「デジュン・・・  
儂等がこれからすべき事は、ガイアを正常に機能させ、デスミオス  
からこの星を守る。  
そして今後この星に住む者達を、儂等のような目に遭わせない・・・  
じゃろう?」

「そうだな、確かにみんなの言うとおりだ・・・」  
精霊と別れてからずっと暗かったデジュンの表情が、いつもの明る  
い表情に戻った。

「よっしゃ!!  
さつさと体を休めて、エイスとオージを倒す!!  
そして必ずこの星を守る!!」

「その一直線馬鹿、それこそがデジュンだな。」

「うむ、落ち込むのはデジュンらしくないのう。」

「馬鹿でこそだ・・・」

「デメエ等！！みんなしてオレをバカ呼ばわりかよ！？」

四人の決意が固まったときだった。

四人は突然の雨に振られてしまったのだ。

「ちつくしよあ！！戦いが終わってこんなにかよ！！」

「つべこべ言わず走れデジュン！！」

「む！！あそこに洞穴がある！！」

あそこで雨宿りするぞよ！！」

雨宿りが出来そうな洞穴を見つけると、四人はすぐさま洞穴に入る。

「ふう、服がびしょびしょで風邪引きそうだ・・・」

「オマエは服なんか来てないだろ・・・」

「つたく、魔法で回復してもらったとはいえ完治じゃないもんで走るのは辛いぜ。」

「・・・ここで雨が止むまで待つか。」

「そうじゃのう。丁度そこに木の廃材がある。」

これに火を付けてはどうじゃ？」

「そだな、このままじゃ風邪引くし服を乾かすか。まかせとけ！！」

「僕は奥で乾かすので、向こうにも火を頼むぞよ。」

「おう、男連中はここで乾かしてるよ。  
まずはこっちから・・・出る、オレの炎おおお！！」

デジュンが叫ぶと、デジュンの右手の平に炎が燃え上がる。  
そしてその炎を廃材に移させる。

「よっしゃ、次は奥だ！！  
燃えろ、オレの炎おおお！！」

デジュンは奥へ行き、先程と同様に廃材に火を点ける。

「お主、いちいち叫ばなければ炎が出せぬのか・・・？」

「いやいや、気分の問題てえか・・・  
やつは技出すときの掛け声で大切だと思うよ？」

「まあお主がいいのならいいが・・・  
では服を乾かす故、覗かぬようにな。」

「わかったわかった。スラップとソールにもちゃんと言っておくよ。」

デジュンは最初に火を点けた場所に戻り、火の傍に座る。  
見ると、ソールは脱いだ服を火の傍で乾かしているが、  
スラップは服を着たまま座り込んでいる。

「ん？濡れた服、脱がないのか？」

「いいよオレは。このままでも。」

「濡れた服着たまんまだと風邪引くぞ？  
てか恥ずかしいとか？男同士なのに？」

「そんなんじゃないよ。」

「何を今更・・・なあソール？」

「・・・」

「ソールだけじゃ不公平だよなあ」

デジュンはニヤニヤしながらスラップに近づく。

「な、なんだよ・・・」

「いやいや、大事な仲間が風邪を引いちゃ困るしな。」

「だからなんだよ・・・！！その手は！？」

「行くぞソール！！オレを援護しろ！！」

「・・・任務了解」

デジュンとソールはスラップの服を脱がせるべく襲い掛かる。

「やめろおおおお！！」

スラップは必死に抵抗するが、服は半分ほど脱がされかけていた。  
そのときだった。

「ん？なんだこれ」

ふに・・・

「・・・む」

ふにふに・・・

二人はスラップの胸から奇妙な感触を感じた。

「なあ、これって・・・まさか」

ふにふにふに・・・

「む、むね・・・」

ブシューーーーーーッ！！

「お、おいソール！？」

ソールは大量の鼻血を噴出し、その場に倒れこんでしまった。

「意外に純な奴なのかソールは・・・」

「おい・・・」

後方より殺気・・・

殺られる！？

「デメエも血を噴出せやああああー！！」



オレは一体何発喰らったんだろう・・・  
気が付いたとき、オレは血だらけの状態で倒れていた。

「一体何の騒ぎじゃ・・・？」

騒ぎを聞きつけて、下着の状態のリアナが覗きに来る。  
そしてそれを見たソールは・・・

「ぐはあああ！！」

ブシューーーーーッ！！

「下着姿で鼻血とは・・・儂もなかなかの美貌じゃのう。」

「・・・」

「スラップ？お主も儂に見惚れたか？」

言ってみたが、とてもそんな空気ではなかった。  
よく見てみると、スラップの胸が・・・

「お主・・・女じゃったのか・・・？」

「・・・」

普段はサラシで巻いていたのだろう。

ほどけたサラシの隙間から小振りな胸が見える。

「何故今まで黙っておった？」

リアナの問いにスラップは長い沈黙の後、

「オレは既に女を捨てたからだ・・・」

そう、この場にいる四人は皆、何かしらの戦う理由がある。  
それはスラップも同様、暗い過去を持っていたのだ。

「オレは女を捨て、奴等に復讐をすると決意した・・・  
オレが戦う理由はオマエ達と同じさ・・・」

デジュンは起き上がり、

「オレ達は仲間だ。」

聞かせてくれ、オマエのことを・・・」

スラップはゆっくり頷き、静かに語り初める・・・

## 第二十二話 雨が上がり、私の心は

オレの村、リトリーの村は本当に何の変哲のない普通の村だった。そんな村に奴等は突如現れたんだ・・・

「クリーチャーだ！！クリーチャーが来たぞ！！」

「くそつたれがっ！！今日はいつにも増して数が多いぞ！！」

「女子供は隠れる！！男供は武器を取れ！！」

オレ達の村にクリーチャーが現れるのは日常茶飯事だった。

だから村の男達が奴等を駆除するのはいつもの事、今日もいつものように駆除出来ると思っていた。

だが、奴等はいつものクリーチャーでは無かった。

数が多いこともそうだが、奴等は何かが違った。

そう、奴等からは何か人の意思のような・・・

「おらああああ！！」

男は斧を振り下ろし、それはクリーチャーの腕を切り落とす。

「イタイ、イタイヨオオオ！！・・・タスケテ・・・タスケテヨ・・・」

「なっ！？こいつ喋るってえのか！？」

奴等はクリーチャーでありながら人間の言葉を喋るのだ。

今までのクリーチャーはただ本能の赴くまま破壊を繰り返すだけであつた。

だがこいつらは人間のように言葉を発する。助けを求めている……

「タスケテヨ……コンナノハモウ、イ、ヤ……ダ」

「くっ……こいつら何を言つて……」

「惑わされるな!!これが奴らの新しい手かもしれん!!殺せ!!クリーチャーは全て殺すんだ!!」

「で、でもこいつら助けを求めて……いるんだろ!？」

「馬鹿野郎!!余所見を……」

男が気付いたときには既に頭を半分食われたときだった。

「あつ!!あああつ……かつ……」

「く……馬鹿野郎が……!!」

みんな惑わされるな!!こいつらはオレ達を殺す気だ!!」

「アアアア!!イヤ、ダ、イ、エアアア!!」

「モウコロシテ、グベエアバアハガア!!」

村人は助けを求めるクリーチャーを殺す。

殺されるクリーチャーの断末魔……今でも思い出す……あれは間違いなく人間だった……

村に現れたクリーチャーを全て殺したときだ。

奴等の体は再生した。切断された手足、潰された頭が全て元通りに・  
・

「な、なんて奴等だ・・・」

再生しきった奴等は一斉に牙を剥く。

奴等の攻撃は今までのクリーチャーの比では無かった・・・

「ひゃびゃがあああああ!!」

「ぎゃぐぎゃがつ!!」

あつという間だった、村人が殺されていくのは・・・

そしてオレの父や母も・・・

「ユナ・・・あなたはここに隠れていなさい・・・」

「何があってもここからは出るんじゃないぞ・・・いいか?」

オレは両親にクローゼットの中に押し込められる。

「イヤだ、イヤだよ!! パパ、ママと一緒にいい!!」

「言うことを聞いて・・・ユナ、これをあなたに渡しておくわ・・・」

それはナイフだった。

「ひっく、ひっ・・・」

「ユナ、あなたは私達が守ってみせる・・・  
それはお守りよ・・・でももしものときは・・・」

そしてゆっくりクローゼットの扉は閉じられた・・・

母から渡されたナイフ・・・

今思えばクリーチャーに襲われたときのため・・・ではない。

これは自害するためのものだ。奴等に苦しめられて殺されるよりは、自分で楽に死んだ方がマシということだろう。

扉が閉じられてからしばらくして、クリーチャーの呻き声が近くなる。

奴等がすぐそこまで来たのだ。

父と母、そしてクリーチャーの叫び声が一斉に上がる。

何かを切り刻まれる音、そして断末魔・・・

その断末魔が誰のものか・・・

オレは怖くて、耳を塞ぎうずくまって震えていることしか出来なかった・・・

ガン、ガンガンー！！

ガリガリガリガリガリ！！

「ひっ・・・」

これは父や母じゃない・・・！！

これは奴等だ・・・殺される！！

そのときだった、今度は殴られたような鈍い音が・・・  
その鈍い音がしばらく続いた・・・  
そして静かになった頃である。

コンコン・・・

「っ!!」

先程のクリーチャーの、扉を爪で削るような音とは違う。  
誰がいるか確認するために扉を叩く音・・・  
これは人・・・？

「・・・・・・・・」

それでもオレは怖くて扉を開けることが出来なかったのだが・・・  
オレがずっと物音立てずにジッとしていて、扉は開かれた。  
そしてそこには・・・

「大丈夫か!？」

人間だった。男性である。  
年は五十代だろうか。鼻の下、顎に白い髭が生えていたのでオレは  
そう判断する。  
そしてよくみると、男の服は胴着であり腕や胸はすごい筋肉でに包  
まれていた。

（格闘家？じゃあさっきまでの鈍い音はこのおじさんが？）

!!

オレはそんなことより、すぐに現状を確認するため、男を押しつけ  
クローゼットから飛び出す。  
嫌な予感がした。この生臭い臭い・・・

それはすぐに気付いた。

クローゼットを出てすぐにそれはあったからだ。

「ひっ・・・」

「っ、ダメだ！！見るな！！」

オレは男に抱き寄せられる。この残酷な有様を見せないように。  
だが大柄な男がこんな小さな子供を抱き寄せたところで、隙間から  
見えてしまうのだ。

「オマエの両親なのだな・・・  
二人は死してなお、クリーチャーをクローゼットに近づけようとは  
しなかった・・・」

その無残に切り刻まれ、食い千切られ、飛び散ったモノをオレは目  
に焼き付ける・・・

こいつらは絶対に何者かの意思を受けている。何故かそう思っ  
てしまった。

こいつらが人の言葉で助けを求めたこと、  
助けを求めながらも、自分の意思とは無関係に襲うような感じ・・・  
それだけの理由で、いや十分な理由だ。オレはそう思った。

もちろん誰かのせいにしたかったということもある・・・  
ただのクリーチャーならば、まだ諦めもつくこともある・・・かも



それ程オレの村はクリーチャーの被害が酷かった。一種の自然現象のようなものだ。

そのためには強く・・・強くならなければ・・・！！  
強くなるには・・・

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 8  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |

「スラップ……」

「いや……」

256

この四人は皆、何者かに村を滅ぼされている……」

「オレはクリーチャー……」

「僕はガイアの手下じゃな。滅ぼされたといっても完全ではないが。」

「オレは謎の組織……」

「そしてオレはクリーチャーに似た生物・・・  
これは偶然か？オレにはどうもそう思えないことがある・・・」

「確かに偶然にしては……  
儂等にはいくつか共通点があるのう……」

四人はしばし考える。

「いや、すまない。」

脱線してしまったな。話の続きをしようか。

そう言い、スラップは話を続ける。

[illegible]

「何をしている？」

「……………」

男はオレに声を掛けるが、オレは気にせず手で地面を掘り続けた。

「まさか村人全員の・・・墓か？」

男の声はまったく耳に入らない。

そう、オレは考えていたんだ。これからのことを。

「ねえ……………」

「ん？」

「おじさん・・・強いんだよね？」

「いや、オレはまだ弱い。修行中の身だ。

この村を守ることが出来なかったしな……………」

「でも、強かった……………」

「そう、か……………」

オレは土を掘るのを止め、男の目を見る。

「あたしは・・・パパとママを殺した奴に復讐をしたい・・・  
あのクリーチャーはいつものじゃなかった！！

あれは人間・・・のようだった！！必ず誰かの仕業なんだ！！  
そいつに復讐したい！！そのために強くなりたい！！」

「復讐は・・・何も生まない。

そんなことを考えるのは止せ・・・」

「それでも！！あたしは絶対許せない！！

あたしを強くして！！あいつらが倒せるように！！

おじさん格闘家なんですよ！？だったら！！」

「しかし何者かの仕業かどうか分からないだろう。

ただ突然変異のクリーチャーであるかもしれん・・・

悪いことは言わん、復讐なんて馬鹿なことは止める。」

「絶対にあれはクリーチャーなんかじゃない！！

あんな苦しそうに助けを求めて・・・無理矢理戦わされて・・・

あたしの村の人達だって、あの人達だって・・・

好きで殺し合いをやった訳じゃない！！」

「・・・オマエはまだ若い、若すぎる。

今日のことを忘れるとは言わん、忘れられるはずもない。

だが普通に生きる。それがオマエを命がけで守ってくれた父と母のためだ・・・」

「あの人達のためにも、あたしの家族のためにも・・・

このままあたしだけ生きていくなんて出来ない！！

あたしは絶対に村をこんな風にした奴に復讐をしたい！！

だからお願い！！あたしを・・・強くじて、ひつくぐだ・・・さい・・・」

そして・・・

オマエ、名は何て言う？」

「ユナ……か。格闘家にはいまいちだな。」

「わかつ、わかりました．．！！」

今日はみんなの墓を作ろう。オレも手伝う。

[illegible]

「師匠のもとで修行すると決めたそのときにオレは女は捨てた。」  
だから今まで女ということは隠して生きてきたんだ。  
これからはオレのことは今まで通りに接してくれ。」

「わかったぜスラップ!!」

悪いな、辛いことを話させて・・・」

「いや、辛いのはこのみんな同じだ。気にするな・・・」

「ふむ、そういう事情じゃったのじゃな・・・」  
しかし、今その師匠はどうなされているのじゃ？」

「あゝ、まあ、喧嘩別れていうか・・・そんな感じだ。  
別れたあとは一人で各地を旅しながら修行したり・・・」

「オレと闘ったあの格闘大会も修行のためだったのか。」

「そうだ。あんな結末になるとは思ってもなかったがな・・・」

「しかしスラップ・・・お主はどうするのじゃ？」  
このまま儂等と行動を供にして仇を探すつもりか？」

「ああ。オレ達のこの偶然、仇・・・」  
それは必ずガイアに関係すると思うんだ。  
だからオレはこのままオマエ等と旅を続けるぜ。」

「お主がそう言うのなら・・・」

「ああ、改めてよろしくなスラップ!!」

「・・・・・・・・」

ソールだけは胸の感触が忘れられずスラップの顔を見れずにいた。

「ああ、よろしくな。」

おし、雨も止んだみたいだし今夜の宿を探そうぜ。」

「そうじゃな、もう日が暮れる頃じゃ。では行くかのう」

「ソール何突っ立ってんだよ、行くぞ。」

あ、待てよスラップ！！」

「・・・・了解。」

ソールはうつむき加減に答えた。

ソールはまだ胸の感触が忘れられず・・・

「さっきまでの雨が嘘のように綺麗な空だな・・・・」

スラップは真つ赤に染まった空を見つめ考える。

師匠と墓を掘ってたときの空も、こんな綺麗な赤だったな・・・

スラップは、腰に掛けてあるナイフを握り締める。

それはあの子がくれたナイフ・・・

師匠・・・・オレには大事な仲間がいます。

あの子は喧嘩して修行抜け出してしまったけれど・・・

この戦いが終わったら、こいつら連れて師匠に会いに行きます・・・

あの子のことを謝って、そして仲間を紹介します。

それまで待っていて下さい師匠・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0175d/>

---

デジュン

2010年10月17日04時27分発行